

若きムジール・『ノート 33』を読む

馬 場 孚 瑳 江

はじめに

ルソーの『告白』やゲーテの『詩と真実』以来、さまざまな動機と情熱が作家たちを自伝的作品へ向わしめた。オーストリア生まれの作家、ロベルト・ムジールは今世紀への転換期に青春を過し、世紀末的なあるいは前衛的な思想と芸術観の洗礼を受ける一方、発展する自然科学へも深い興味を抱いた。彼は上昇するプロシヤ帝国の勢いと、崩壊に至る祖国ハプスブルク帝国の凋落の道程を経験し、ついにはファシズムの抬頭をまのあたりに見なくてはならなかった作家であった。そのムジールが自己の生涯について何か書きとどめようと初めて決意したのは、第一次世界大戦に従軍のさなかであった。ゴーリキの自伝を読了したことが、直接の誘因となったようだ。このような自伝的記述を試みるにいたった動機について、ムジールは「原動力は、自分自身の弁明を行ない、自らにそれを明きらかにすることである」(T 313 ff.)と、述べている。『日記』には、その決意が告げられた後に、彼の幼年・少年時代の思い出がいくつか精神分析的手法で再現され、次に『図書館司書』というタイトルの自伝的小説の構想が荒っ

テキスト

Robert Musil: Gesammelte Werke. Hrsg. von Adolf Frisé. Band I. Der Mann ohne Eigenschaften. (省略記号 MoE) Band II: Prosa und Stücke. Hamburg 1978. (省略記号 P)

Robert Musil: Tagebücher. Hrsg. von Adolf Frisé. Band I. Tagebücher. (省略記号 T) Band II. Tagebücher, Anmerkungen, Anhang, Register. Hamburg 1976. (省略記号 Ta)

ぼく素描されている。ゴーリキの人生に比べれば、自分には注目に値するものはほとんどないに等しいと語るムジールだが、ここで注意すべきなのは、ムジールの書くという意識のなかの、過ぎ去った自己の生の想起と物語志向のあわいの微妙さである。自己を語ろうとするとき、心理学的道具立てを越えて、そこにはムジール自身の夢想と願望の影が投げかけられる。物語を構築しようとするとき、彼の虚構への意志を救うようにして、そこには自己の生から汲みあげてきたものが確実に封じ込められる。「自分自身について私たちはほんとうにごく僅かしか知らない。不断の働きを通じて自己を反映することができるもうひとつの存在がなければ、私たちは恐ろしいばかりにひとりぼっちだ」(T 101) という認識がムジールにはあるのだ。彼にとっての「不断の働き」とは、書くことに他ならない。

ムジールは、いつしか結末へ続く道を見失ってしまった長篇『特性のない男』を、シシュフォスのような痛ましい努力で死に至るまで書き続けた。そのおびただしい断片は遺稿として残った。他方また自分自身についても実に多くの省察を残した。彼自身の生涯全体が見渡せるようにという意図から、それらの省察をある程度まとめたのが『自伝』と彼が呼ぶ『ノート33』(T 911-966)である。ムジールに関する伝記的知識の多くを、私たちはこのノートに負っている。『ノート33』は家族の歴史についてのムジール自身の事実調べや、記録集めに基いている。と同時に例えばトーマス・マンのような作家としての名声を望みながら得られなかった失意と屈折した感情、そして見果てぬ夢に満ちた自己省察、不遇で孤独だった晩

参 考 文 献

Karl Dinklage (hrsg. von): Robert Musil, Leben, Werk, Wirkung. Wien 1960. (省略記号 LWW)

Karl Dinklage (hrsg. von): Robert Musil, Studien zu seinem Werk. Hamburg 1970. (省略記号 LMS)

Sibylle Mulot: Der junge Musil. Seine Beziehung zu Literatur und Kunst der Jahrhundertwende. Stuttgart 1977. (省略記号 SM)

なお、本文中で省略記号の後の数字は当該ページを示す。

年のその集積でもある。しかもこのノートには、彼が生きた内実に心理学的骨組みを与えた後に、もういちどそれを時代のなかへ投げ返してその歴史的背景を重ね合わせることによって、自己の精神史と時代のその相関関係を確かめようとする努力の跡も認められる。このようにムジールは自己自身については多面的に——政治からヴィタ・セクスアリスまで——倦むことなく語った。しかも、精神分析学の祖フロイトとは逆に、心理学者としての鋭い心理分析の矛先を自己からそらすこともなしに語った。その点でムジールは、K. コリノの**(1)**ことばによれば、「露出狂の傾向さえあった。」だからといって、ムジールは我が国におけるいわゆる私小説作家のようではもちろんない。個の経験を語るに価するものとしてなまに表出する無邪気さはムジールにはないし、そもそも物語ることの若干の快樂すら欠けているように思われる。物語るムジールの横顔は渋面ですらあって、晦渋な思弁の故にその口調は重たいのである。

「私は物語る。だがこの《私》は虚構された個ではなく、小説家である。諸般に通暁した、辛辣で醒めたひとりの人間である」(T 579) と、20世紀の希有な百家全書家ムジールは時代へのアイロニーをこめて、自己の依って立つところを表明する。複雑だが堅固な基盤をもつこの《私》——彼の神経症的焦立ちと、満足を知らない憂鬱があやうくその統一を脅かすことがあっても——が、小説を構想するムジールと、自己を語るムジールが共存するところなのである。それゆえ語られた自己と、小説の主人公—ウルリッヒ—は、血肉を分けた兄弟だといえよう。このようにムジールは《私》という内面の窓から凝視し、思索を重ねるひと、《私》の探究からついに離れることができなかつたひとであった。そのために彼は《私》をとりまく社会と時代の精神的、思想的状況を膨大な知識を駆使して分析、批判し、また人類の神話時代の記憶を自己のうちに共有するほどに、《私》の内面

(1) Karl Corino: Ödipus oder Orest? Robert Musil und die Psychoanalyse. In: Musilstudien 4. Vom Törleß zum Mann ohne Eigenschaften. Hrsg. von Uwe Baner und Dietmar Goltschnigg. München—Salzburg 1973, S. 127.

の深部へ精神分析の測鉛をおろした。そうすることによって、《私》を無限の可能性の「もうひとつの状態」へ投射していったのである。ムジールは真実、《私》という宇宙の大胆な冒険者、《私》の永遠の探究者であった。そして彼の自伝的なものへの傾斜は、そのような《私》の探究に最も近しく、最も確実な素材であるムジール自身への執拗な、ナルシスティックなまでの尋問と弁明の繰り返しのようと思われるのである。

私がここで試みるのはムジールの文学世界のなかへより深く参入するために、その世界と呼応、往還しつつ彼が語る自己自身を、ひとりの人間の形成過程としてとらえてみたいという願望によるものである。誤解を恐れずにいえば、『特性のない男』こそ実はムジールの全てが凝集している『詩と真実』ではあるまいかと、私はひそかに考えているからである。時間的推移における人間を認識するために、体裁のぶざまさを危惧しつつ、伝記的外観をとりながら、彼の生涯を貫いて特徴的なモチーフ、イメージ、欲望を彼自身に語らせるという形式を試みている。多くの引用から成り立っているのはそのためである。そしてもっぱら紙幅の関係から、この試みで扱うのはムジールの処女作『士官候補生テルレスの感い』執筆以前まで、つまり作家のプレエクシステンツの時期までと限っている。もちろん新編の『日記』と『ムジール全集』が刊行されている今日、ムジール研究者たちの労苦に満ちた調査研究の成果もこの試みの依り所としているのは言うまでもない。

K. コリノはムジールのありようやいり組んだ全体性を再構成することの困難さの理由として次の3点を挙げている。⁽²⁾ a) 彼が専門の心理学者であること。b) 偉大な、だが複雑な作家であること。c) 神経症患者であり、なおかつ、卑しい時代に同調したり、狼どもといっしょに咆えたりする必要のないように意識的に神経症患者になったのだと、主張していること。この指摘は、ムジールがどんなに精緻な理論構成をとるにしても、あるいはどんなに饒舌なことばの海を現出させようとも、それはただちにアイロニ

(2) Karl Corino, a. a. O., S. 123.

(40)

一の精神にゆすぶられて必らずしも正当な理解への道を拓きはしないという事実を適切に言い当てている。私たちは一再ならず、明らかに矛盾と思われる言動、そして解きほぐし難く入り組んだ韜晦な思念に出会って立ち止まらざるを得ないであろう。あるいはひょっとしたら、ムジールの緻密な虚構の網にとらえられるやもしれない。しかしこのような困難のかなたに明滅しているもの——ムジールの世界に独自の、恍惚とした魂のロマンティズムと、神秘主義に近接する愛の頂きの輝くばかりの美しさ、あるいは体系を拒んでいるが故にバロック的に多彩な精神の豊饒さ——は、私たちが魅惑してやまないものではないだろうか。このかなたに明滅する微光が私のささやかな試みを通じて少しく感知されるならば、それは望外の僥倖である。

もくじ

ボヘミアとモラヴィア 父と母 家庭 ハウスフロ
イント 最初の記憶そして母と息子 子供部屋の憂愁
スタンダールの体験あるいは性の目覚め、ロマンティック、
詩的 テルレス前史 ブリュン 魂のとき

1880年11月6日

クラゲンフルト（オーストリア）でローベルト・ムジール誕生。工学者アルフレート・ムジールと妻ヘルミーネ（旧姓ベルガウアー）のひとり息子。ローベルト・ムジールはカトリックの祭式にのっとなって洗礼を受ける。

《ボヘミアとモラヴィア》

「私自身半分はズデーテン地方に定住したドイツ人の血筋、4分の1は名前も示すとおりチェコ人の血筋を引いている。私が出たムジール家はモラヴィア地方のきわめて古いチェコ人の農家である。が、祖父は故郷を出て医者になり、グラーツ近郊に農場を持った。そこで父とその兄妹たちは、自分たちの素姓について

ほとんど知ることもないままに、まぎれもないグラーツ人として大きくなった。祖母はザルツブルクの出身だった。」(P 948)

ムジールは後に1921年から『プラハ新聞』に若干の寄稿をしたとき、祖父の名と彼の生地になんで《Matthias Pychtarschow》という筆名を用いたこともあるように (Ta 202), ムジールの父方の祖父に対して覚える親近の感情はとりわけ強かったようだ。「私が幼かった頃, 少年の頃, しょっちゅう言われたものだった。おまえは(父方の)おじいさまのようだよと。それは我儘, エネルギッシュ, すぐれた能力の持主, 気難かしいという意味合いだったが, 尊重の念をこめて言われた。……それを聞いて私はいつも嬉しかった。」(T 936) 「実にはのびのびした家庭だった, 父方の家は。兄妹たちは愛情に結ばれて母親のまわりに集っていた。みな自家の牛から採った牛乳をたっぷり飲み, コーヒーはわずかに数滴しか入れてはならないのだ。……兄妹のロマンティシズムは遺産分配の際も毀れないが, 後になって兄弟の1部は仲違いし(女性が原因で), 他の関係も冷たくなったところがあった。」(T 954) 父の兄妹は自殺した末の妹も含めて5人である。長兄のルードルフは参謀本部将校, 貴族に列せられ, 陸軍中將として退役した人, 祖父とともに幼いムジールが軍人を志したときに, 少なからず心理的な影響を与えた人である。一生実直に工学者の道を歩き続け, その軌道から逸れることのなかった父とは対照的に, ムジールは, 士官から医者へ, さらに祖先のように土に帰って農業を営むという変化に富んだ人生を生きた祖父のようだったという。つまりムジールも, 軍人志望から工学者へ, ついには斡旋されたグラーツ大学心理学科の助手職も断わり, 作家への道へ踏み出したというように, 生涯に3度職業の転換を経ている。ただひとつ異なるのは, 祖父はそのたびに成功したが, ムジールはそうはゆかなかったことだという。

他方, 母ヘルミーネの家系においては, 曾祖父のふたりがボヘミア地方ホロヴィッツの官吏であった。

「興隆する市民階級はすすんで法律職に就いた。それは実用的だったが, 精神

(42)

的満足でもあったらしい（ゲーテの祖父や父？を見よ）。私がごく若い頃，行政は法律家の手中にあるという観念がまだ支配していた。やがて技術専門家の解放がやってきた（宮中顧問官の称号，各省の首脳）。それは私にはごく当然に思われたけれども，ひょっとしたらひとつの没落かもしれなかった。法学の退位。私自身はそれを《現代的》と見ていたし，何よりも権力の解体にかなり共感を寄せているのだ。母方の祖父はもう法律家ではなく技術者になっていた。祖母（ボヘミア出身）の兄は医者。このような職業選択は都会に住む貴族の家庭の場合とは何か違った意味を持っていた。」（T 954 ff.）

この祖父フランツ・クサーヴァ・ベルガウアーは主にプラハで工学教育を受ける。そして蒸気機関の利用以前だから馬が引く鉄道ではあるけれども，ヨーロッパ最初の都市間鉄道をブトヴァイスとリンツの間に敷いたオーストリア鉄道界の先駆的な指導者のひとりだった。「穏やかな祖父母。その《風変わりな》息子たち。島のような数の記憶を持った夭逝した癡癩の息子。」（T 935）その他に，士官だったが恋愛に破れて南アメリカへ渡り，商人となって生涯独身を通した長男。4男のヨハン・ネポムクはザルツブルクの駅長になったから，父の跡を嗣いだことになる。ムジールがムッキイの愛称で呼ぶ変人の3男モーリッツ。「彼は元来化学者だった。……が，それを放棄して，リンツの石工の会社を買い取り，そこで墓石ばかりを作った。それは彼がショーペンハウアーを読んだためだった。それも気まぐれから。他方おそらくは彼が死ぬまで糖尿病を怖れていたせいかもしれない。」（MoE 2025）母ヘルミーネはこの兄弟たちの末っ子としてリンツに生まれた。

このようにムジールの祖父母は，19世紀前半ハプスブルク帝国内の移動が可能になった時代に，周辺の辺境領から帝国の中心を占めるオーストリアへ移住し，新たな市民階級を形成した世代だった。父方の祖父母は農民の出身らしく家夫長的雰囲気が残った，だが素朴な情愛もまだ通い合う家庭を，母方の祖父母は成功した富裕なブルジョワジーのそれと呼び得る家庭を営んだ。しかし故郷との絆は切れた。父母の世代，そしてムジールの世代もハプスブルク帝国内外の諸処に散らばった。祖父の出たモラヴィア

の首都ブリュンに両親が結局は住みついてしまった点に触れて、ムジールは「私たちを出発点近くに連れ戻したのは全く偶然であった。慣習や願いが両親をこの地に結びつけたのでは決してなかった。運命がもはや自分たちをこの地から去らせてくれぬことを、両親は喜んではいなかった。」(P 948 ff.) と、記している。父は、生まれ故郷グラーツが帝国の首都ウィーンへゆきたかったのであり、実際また、それを実現するべくしかるべき方面へ働きかけもしたが実らずに終わった。一方、生家にゆかりの深い人びとへの愛着が強かった母も故郷リンツへ帰ることが望みであった。

ムジール自身のなかに特定の地への郷愁や執着のあからさまなことを探しあてることはできない。だが、自分の血の半分はズデーテン・ドイツ人の、4分の1はチェコ人のものだという彼の認識を、例えばパリへ亡命した現代チェコの作家ミラン・クンデラのことば「作家は今日の社会的現実にはばかりではなく、根源的な心のありよう、幻想、神話、象徴として変わることなく現在の過去にも呼応する。……私たちはまぎれもなく、カフカ、ハシェク、ムジール、ゴンブローヴィッチ直系の後裔⁽³⁾だ」を、重ね合わせてみたい。その時数百年にわたってハプスブルク帝国内でいくつもの異民族の離合集散が織り上げた歴史と芸術は終焉したのではなく、国家の形態と独立性は変わってもなお、民族の記憶の底流に脈打ち、そのなかからなおも生き続けようとするひとつの文学精神の系譜がたくましくすかし見えてくるような気がするのである。

《父 と 母》

父アルフレートは、当時からすでにオーストリア工業の中心地だったクラゲンフルトで織機のモーター、採鉱・製鉄機械の設計と製作に従っていた。彼はパテントも獲得するすぐれた技術者であるだけにとどまらず、自らが専門とする分野の著書、通産省派遣のパリ万国博覧会訪問の報告書

(3) Ein Gespräch mit Milan Kundera, der Roman ist die Schule des Verstehens. Interviewt von Werner Paul. In: Süddeutsche Zeitung, 5/6. November 1977.

(44)

その他を著している。(Vgl. LWW 195 ff.) 1874年ヘルミーネ・ベルガウアーと結婚し、2年後に娘エルザの誕生をみるが、夫妻に初めて恵まれたこの娘は1年に満たない生命で夭逝する。以後、夫妻はひとり息子ローベルトを得るだけである。回想するムジールの眼に浮かぶアルフレートは「寂しい父」、**「明晰な人」**(T 914)であり、ヘルミーネは**「激しい母」**、「寝乱れた髪がきれいな額にかかるように、こみいった人」(T 914)である。

「父——もの静かな、そして死の怖れを知らない、どこか不安気な人。臆病ではないが、文字通り不安気で心配性の人。適切なことばで言えば、穏やかでおびえやすい資質。それを包み隠すかなりすぐれた能力。そのような父の素質をなにがしか私は、母方の遺伝である好戦性とまじり合わせて受け継いだ。」(T 911)

「父——ブリュンへ招聘されるまでは上昇気運。(研ぎすまされてゆく彼の諸特性。人のありがちな欠点のない優等生。しかしいかんせん、精神的に爆発するものが何もない。きっと職業選択の誤りもないだろう。自然科学を記述する彼の能力を見よ。) それは新しいタイプの工科大学ができつつあった時代にもかなっていた。父は数学の領域でも優等生だったが、好きではなかった。ヴィーンとグラーツでのポスト獲得不首尾。ブリュンに長くとどまる。功名心、そういったものの喪失。私もそんな風になれたらと思うことがしばしばある。つつましく、家庭的な、きちょうめんな性質がまさってくる。」(T 958 ff.)

ひとつの人格として父を見た場合に目立つ人間的な優しさ、それと裏表の脆弱な資質、さらにまた職業上の失意などがどんなに分析的に述べられていても、父に注がれるムジールのまなざしは、静かな湖面のようであり、愛惜の思いさえにじみ出ている。「息子の父に対する自然な愛情は母に対するそれよりも強い。」(T 962)

父に対する姿勢とは著しく対照的に、母をめぐるムジールの考察や回想は、複雑に屈折した心理をのぞかせている。ある時はほとんどエロティックなまでに濃密な母の気圏に包まれていたことの哀切な告白であったり、ある時は非難、弾効の標的とばかりに、酷薄な告発を執拗に練り合わせたりする。青年時代のある時期までムジールは母に対して、極端から極端へ大きく動揺する、矛盾に満ちた心の振幅に苦しめられる。このような揺れの心の過程を、精神分析学の成果に従って、私たちは《マザー・コンプレ

ックス》と呼ぶことができる。⁽⁴⁾

「末っ子。名誉心が強い。兄弟たちや自分の名誉を、そして精神的な面での品性も大切にしている。そこから生ずる支配衝動。」(T 962) 「彼女の性格の気高く高潔な側面。父や兄たちに寄せる肉親の愛。」(T 935) ここに母ヘルミーネの人格の一端が浮び上がっている。富裕な生家ベルガウアー一家を誇る名誉心、新興階級に見られがちな潔癖なまでに健全な道德感覚。そして末っ子らしい我儘と肉親への甘え。彼女の誇り高さをとりあえずは満たすにたる職業上のスタートを切ったとはいえ、元来が物静かで善良なムジールの父である。やがて職業的に帝国の中心に乗り出す意欲を失い、人生に対しても後退的で穏やかな態度をとるにいたっては、母の熱い名誉心がそれに耐え得なかったのかもしれぬ。そうでなければ、ムジールの記憶の根底に抜き難く刻まれた、そして何ものにもまして幼い彼に深刻な葛藤をもたらした母の神経症的徴候の説明がつかない。

「ひどく神経症的にピリピリしていること。激しさ。ひとつのイライラがついには爆発するまでに執拗に掘りさげること。激しさはやがて泣きじゃくりへ。これら一連の発作は内面的なものからきている。気分が上向して幸せな、相対的にヴェランスのとれた日々のはきまって爆発する日 came。結婚との関係は不明。父を評価していたが、男らしい男へ傾いていたらしい彼女の好みに父は合わなかった。あとになってヒステリーの傾向。しかし驚くべきことに嘘がない、芝居がかったこともない。つまり、弱い人間だったらヒステリーを伴わなくても現われるような何か、発作という反応になってしまう何か、その何かを神経過敏のあまりスムーズにおさめることができなかつたということなのだろう。」(T 935)

父に求めて求め得なかつたものを、母はつぎに息子に対する教育の原理にする。もちろんその結果は彼女の《激しさ》故に穏やかならざるものになってしまう。父は後景に退いてふたりを見守るばかりである。

「息子である私の愛と賛美を得るための戦い。が、息子に対してどちらが優越的な力を持つかについて両親は1度として争わなかつた。いつも激しさという形をとる。私もいくらか似たようなところから応酬した。私だつてもともと激しい

(4) K. Corino, a. a. O., 148 ff.

(46)

のだ。落ち着いて決すべきなのに、私だってイライラが昂じてくる。沈着な判断、正常な反応を私は全く知らなかった。父はただ私に良きアドバイスを与えようとするだけだった。私と母の争いのときにはいつも父は傍観しているだけという印象が付きまとった。まるで決着をつけたくないともいう風に。父は何だか変だった。私のなかではまた、女に叱りとばされてたまるかという少年らしい男らしい世界が大切だった。このように、私と母の関係には、それと気づかずして、性的に対極的な何かもあったのだった。」(T 935)

お互いの激しさがむきだしに衝突するようなこの母との果しない軋轢、葛藤は、やがてムジールを全寮制の士官学校へ飛び出さしめる大きな要因となるが、他方美しい母のなかに、人生で最初の異性を感知してしまったという感情は、ムジールの内面に深く潜み、浸透して、意識を束縛し続ける。ムジールが父にも母にも愛されなかった息子だとは誰にも断言し得ないことだ。が、そのような事情に加えて、後で見るように、母が家庭内で、もうひとつ、父でもない息子でもない第3の男と特異な関係を持続させたという事実もある。それが単に父や母に対してばかりではなく、友人たちや女性一般に対するムジールの愛のありかたを根源から不確かな、困難なものにしたことは否み難いように思われる。

《家 庭》

「何も信じず、信仰に代わるものもない啓蒙された家。」(T 316)そして政治が話題になることもめったになかった。父は「政治に拒絶反応、というより政治を理解する能力が欠けていた。」(T 963)「ストライキを起して不穏な労働者たちを頭から悪と思い込んでいた両親。」(T 915) このような社会批判的視野の欠如と、下層の人びとに対する非情な侮蔑は、19世紀に急速なテンポで進んだ工業発展の波に乗った新興の市民階級ではとりたてて珍らしくもない傾向かもしれぬ。第2世代である子女に対して、家庭内で道徳を強要し、厳しくしつけるのもこの階級の特徴である。息子に対する厳格なしつけの例として、ムジールが好んであげるのは、就寝中のオナニーの禁止である。ムジールは『日記』のなかで時期を異にして3度そ

のことに触れているが、このしつけの是非をめぐるムジールの評価が天地ほどに相違している。家庭内の道徳やしつけが母を通じて伝達されるからには、それもまた母との葛藤の濃淡を反映せざるを得ない。

「就寝のとき腕を毛布の上に置くようしつけられたこと、私の思い違いでなければ、腹部のあたりを我知らず触れることすら罪として恐れるべしときつく言いわたされていたことも覚えている。だから両親の体の同じ部分を考えることも全て私には怖ろしかったのはむべなるかなだ。この衛生学的モラルの教えは母によるものだと思う。それが与えた影響を思い返すとき私が感じるのは、ただ腹立ちだ。両親はあらゆる点で啓蒙の側の人だった。母はきっとひたすら健康への配慮だけから断固として私にこのような命令を押しつけたのだらうと思う。私はあまりにも簡単に影響されやすかった。全てが私に確実に強い影響を与えた。今思い出してみると、それは法外に強烈な干渉、威嚇のように、長い間にわたって私の内面を傷つけてきたかのように思われるのだ。」(1916年頃, T 314 ff.)

「(性的なもの)を暗に指している唯一のことは、必ずしも特定の理由からではないが、手をいつも毛布の上へ置けという戒めだった。しかし、この戒めは効果的で、燃え上がりやすい心情をぐいと抑えてくれた。思い出は感謝と信頼の色合いを秘めている。」(1930年代終り頃, T 962)

第1の回想はムジールが初めて自己の生涯の記述を志した時期のもの、妻マルタとの愛に至福の充実を感じていた頃のものである。第2のそれは晩年の『ノート33』に記されている。あきらかに母への意識の変化が認められる。この間に流れた時間のなかで、ムジールは更年期障害で肥満した母を見、1924年には糖尿病で母を、次いで父も失なっている。ここにいたってようやくムジールは、母へのコンプレックスな感情から脱却した境地へたどり着いたようである。

再び両親の作り上げた家庭へ眼をやれば、彼らの宗教との関わりにはムジール自身が不可解な表情を隠していない。父方の祖父母の家庭については、「この家の雰囲気似つかわしくないのは、非カトリック的なこと、そもそも非宗教的なことだ。おそらくは一種の人格神論、人間存在の一種の性善性、秩序性が貫かれていたのかもしれない。おそらくはまた神を語り過ぎることへの畏れも。父より弱い母と、ダーウィンの影響を受けた父の

(48)

間には一種の契約もあったかもしれぬ。」(T 963)あるいは「父。きっと根は宗教に幻滅した人。」(T 959)

そして母の死が訪れたときの叙述。

「パパもママも来世の存在を信じていない。亡骸に何が起ろうと同じこと。葬式は最も安上がりの形。司祭なし。誰にも死は知らされない。わずかばかりの友人だけ。柩は貨車へ積み込まれる、操車場で。速達ではなく普通貨物で。誰もつき添わない。土曜日の朝から火曜日まで柩はレールの上を駅から駅へさまよう。ライヒェンベルクで柩は茶毘にふされる。灰は1年間その地で保管され、そしてまき散らされる。」(T 629 ff.)

このように徹底して宗教を否定しきる姿勢が、父あるいは母の個性の強さや自信の表われとは、ムジールにはとうてい思われないうだ。時代が宗教の権威から解放し、自然科学に対する絶対的な帰依の信念を父に与えたのであろうか？ ムジールの考察は推測の域を出ない。結局ムジール自身の遺体も両親の非宗教的なやり方にならって、火葬され、つばに納められて、やがて妻の手で亡命地ジュネーブ郊外の森にまかれるのである。

1881年9月

ムジール家、ボヘミアのコモタウへ転居。クラゲンフルトで勤めていた会社が鉄道会社と合併したため、父は辞職し、通産省に願い出て、この地の機械技術者養成専門学校の校長に就任する。わずか1年の滞在である。

《ハウスフロイント》

まだ幼すぎるムジールには、この短かいコモタウ滞在は、誕生の地クラゲンフルトと同様、直接的な記憶をとどめていない。ところがこの後両親の死に至るまで、ムジール家の家族関係に大きな影響を及ぼさずにはおかないひとりの男、ハインリッヒ・ライターが出現するのはこの町においてである。子供のムジールを写した幾葉かのなかに、とりわけ私たちに奇

異なる印象を与える1枚がある。⁽⁵⁾ 8歳の彼がアッヘン湖へハイキングしたおりのものだ。中央の岩の上にどっかと腰をすえた男、杖を持たない右手をポケットに突込み、この男に寄りかかるように立つムジール。男のもう一方のかたわらには母ヘルミーネが立ち、彼女の左手と、わずかに彼女の方へ身を開く男の右手は触れ合わんばかりである。そして父はこれらの人々の背後にひっそりと、妻よりは息子に近く立っている。ごく自然な家族写真では、父ないしは母が前面の中央に坐わるであろう。が、ムジール家の家族写真では、父ではない男が落ち着いた自信をたたえた表情で、本来両親のいずれかが坐わるべき場所を占めている。この男がハインリッヒ・ライターである。写真のなかで誰がこのハイキングを楽しんでいるだろう。かすかに浮き浮きした表情をのぞかせているのは母か。少なくとも少年の眼は笑っていない。一見静かだけれど、奥に怒りと傲慢さを秘めた挑むようなまなざし、そしてどこかしらなげやりな姿勢から、この構図のなかで少年が孤立した位置にいることが推測される。

ライターはムジール家の、Hausfreund (i) 長年家庭や家族ぐるみで親しく交際している友人。ii) <冗談で、暗に> 既婚女性の愛人) とか、Hausgenosse (他人といっしょにひとつの家計で生活する人) とか呼ばれる存在である。ライターはアルフレートが赴任した専門学校の非常勤講師だったから、まずは父の同僚として知り合ったのだろう。が、やがて母ヘルミーネの方とより親密の度合いを増して、彼女のいわゆる<男らしい男>、<彼女の人生の唯一の実質>(T 96)となる。ムジール家がブリュンへ移り住んでから、ライターもコモタウを離れ、ビーリッツ(ブリュンからそう遠くはないポーランドとの国境に近い町)で教師をしながら、教授資格を取得し、1900年にブリュンの国立繊維学校へ転職した。以後ヘルミーネの死までライターはムジール家とひとつ屋根の下に住み、いっしょの生活を送った。(Vgl. LWW 204 ff.)

(5) Wilfried Berghahn: Robert Musil in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten. Hamburg 1963, S. 23.

(50)

ヘレーネ・クローディ=ティーツェが、A. フリーゼに宛てた手紙（1956年4月26日付）は、ムジールの両親とライターの交際ぶりを伝えている。ティーツェ家はリンツに住み、ヘルミーネ個人やベルガウアー家と親交を結んでいた。ヘレーネの父ユーリウスは工場主で、アルフレート・ムジールが晩年にオーストリア国内へ帰る最後の試みを企てたとき、住居の斡旋を依頼した人である。付記すれば、この依頼の手紙のなかでもアルフレートは「そうなれば、私たちはライターと同じ住居を分ち合うでしょう」と書いているという。（Vgl. LWW 205）

「1918年夏、私は父、ムジール御夫妻、それにライター教授といっしょして、ザルツカンマーグートにあるバート・アウスゼーへ出かけました。ほとんど毎日いっしょに私たちは、散歩したり遠出したり致しました。アルフレート・ムジールは親切で、落ち着いていらして、思いやりのある上品なかたでした。夫人も同じように心の優しいかたでしたが、御主人よりもずっと快活でいらっしゃいました。ライター教授はムジール御夫妻とたいそう仲がよろしゅうございました。教授は御夫妻が亡くなってからも、リンツや私どもの地所がありますトラウンキルヒェンへ訪ねてこられました。教授は（ヴェルスの）グリースキルヒェンに住んでおられ、独身でした。そこに親戚関係がおありだったようです。ムジール家の方は教授といっしょに時おり、グリースキルヒェンで夏の休暇を過ごされていたように思います。」（Ta 55）

ライターの存在をめぐるアルフレートの心理的葛藤のなまなましい声を私たちはじかに聞くことができない。ムジールが語る父のプロフィール、そしてアッヘン湖畔の寂し気な彼の立ち姿から漂いである悲哀が私たちの推測を許してくれるならば、ハウスフロイントのごとき存在を夫婦の身近に許し、ティーツェの手紙にあるような3人3様のハーモニーの域に達するためには、アルフレートにほとんど諦念に近い寛容の精神が要求されただろう。それによってまた逆説的に自己の妻へ向う愛を確認するという観念操作も前提としなくてはならなかっただろう。加えて、3人が共通のある大切な何かを了解し合い、そこからそれぞれが遠心的に外延へ独自のモラルを作り得てようやく可能な、持続する関係となったに違いない。しかし眼を初めて外界へ向けてゆくとき、まっさきに飛び込んでくる世界の縮図

が家庭である幼な子にとっては、「親戚ではなくて、父母双方の友人であるおじさん、つまり子供が閉じていた眼をパッと開くともうそこにいる、そんな感じの〈おじさん〉」(P 282)の存在は、多感な子供の心に混乱をもたらす反抗心を助長することはあっても、決してのびやかな成長を促しはしない。

『日記』にムジールがきれぎれに記した小説の構想（主として『トンカ』のそれ）で、「R（ローベルト）は絶えずRe（ライター）と母の関係にいらいらさせられる」(T 97)ということばがある。ここには母の愛を全面的に自分に注がせずに奪っているライターに対する少年の嫉妬心が露わである。ライターへの深い憎悪に満ちたムジールの猜疑心と妄想は、ライターに似た弟を持つという小説上の構想を生ぜしめさえする。「彼の弟はあのイギリスの絵画にあるお小姓のようにおとなしく弱々しかった。弟はローベルトと母の関係を悪化させるばかりのReに似ていた。」(T86)あるいは「この天逝の象徴である弟が、父の息子かハインリッヒの息子か、解を出すことができない。」(Ta 862)

ムジールが母を古えのオイディプスのように父とではなく、全くの他者であるライターと争ったこの異種の三角関係は、絶対に所有したい愛をライバルと必ずや競わずにいられない意識をムジールに根づかせる。それに相似した形は、ムジールの実際の間人間関係にも反映される。例えば相まみえることなくして天逝した姉のエルザを想う。「この姉は私の興味を引いた。時おり私は考えた、姉がまだ生きていたとしたら、どんなだろう？ きわめて親密になっているだろうか？ 私が姉の地位を奪っているだろうか？ と。それを確かめる機会はなかった。」(T 953) もうひとつの例。第1次世界大戦に従軍して、ムジールは麗わしい南チロルの自然のなかにいる。しきりに離れている妻マルタが想われる。やがて妻は衛戍地ボーツェンにやってきてそこで住居を借りたので、軍務のないときには会うことが可能になる。このときムジールは珍らしく朗らかに高い調子で、恋人の貞節を信じ、神秘的なまでに永遠の愛を賛美する。その高揚した感情の頂きにい

(52)

るさなかに「思いつき。来世では誰に優先権があるのか？フリッツか、私か？ 私だとしたらなぜか？」(T 306)と、記すのである。フリッツとはマルタの最初の夫、新婚旅行中にイタリアで病死した。ライバル意識が緊張をはらんで見えざる対象とすら牽引し合うこの構図のより深化したヴァリエーションを、やがて私たちはムジールの作品のなかに多く見つけることになるだろう。

1882年9月

北オーストリアのシュタイアへ。父アルフレートは鉄鋼業の専門学校および実験研究所の設立と発展のために責任者として尽力する。「シュタイア、きわめて慎重に選ばれた場所。軍需工場——社会的問題と軍備拡大競争。」(T 316)

《最初の記憶そして母と息子》

「私の最も古い知識は子もりのおばさんについてのものだ。ベルタとって、大柄で太っちゃで、気立てがよかった。私の大好きなお話を語ってくれた。そのことはあとから両親に聞かされて知った。ベルタのことを考えると、まるで彼女の匂いをかぐような心地がする。頻繁というほどでもない、まれというほどでもない間隔で着がえられる衣服にしみこんでいるような、人の善い、乾いた汗の匂いを。」(T 314)

匂いの連想は、子もりのふくよかで善良なイメージから、再びコンプレックスな感情を抱いている母へと流れてゆく。

「匂いについてのふたつめの思い出は今でもまだ私のなかで生き生きしている。母のチンチラの毛皮にまつわるものだ。雪をふくんだ大気のような、どこか樟脳のような匂い。それと似たような思い出はないのだが、この毛皮の思い出には何か性的なものがまじっているようだ。この思い出のニュアンスからすればそれはひとつの欲求だったのではないだろうか。裁縫室のごみ、あの色とりどりの絹や毛の布きれ、そして色鮮やかな小物でいっぱいのお店のなかみが愛のイメージと結びついてたのも思い出す。この愛のイメージは私がごく小さかった頃は大変強かったが、母にはいずれにしても否定的にしか結びつかなかった。」(T 314)

この回想も母を拒絶する感情がまさっていた時期になされたものである。直接生き身の人に対してではなく、毛皮や小物を媒介にして<欲求>と呼ばれる幼ないなりの愛の発露を感知する——この点からムジールの性の目覚めがひどく早かったことが想像される——、いわばフェティシズムの傾向は、肉親からの豊饒な情愛が拒まれているムジールの孤独な心情を暗示していよう。しかし外部へ表われた態度が、次の引用に顕著なように、母に対する激しい反抗、攻撃性という形を取ったのは、ムジールにとって二重に悲劇的といわざるを得ない。

「意識的に記憶にとどめられた争いの発端——散歩。刈り株の畑（いまでも柳の立ち並んだ小川や野性のすみれを思い出す。）少年はせいぜい5歳くらい。見かけは激しく強情な様子。靴をはいたまま水溜りか、そんなようなところへ。罰としてそれより先は裸足で歩かねばならなかった。足の裏をチクチク突き刺す何がしかの思い出。家でもまた厳かな処罰。むちはあらかじめ水をつけられて柔らかくなっている。パパはひどくていねいで真剣。私を諭すとき、パパはほとんど泣いていたと思う。全てはいささか儀式じみていた。処罰はあきらかに若い母親に促されて執り行われたもの。だからこのできごとより以前にもう何度か争いが、（きっと強情と激しさがもとで）あったのだろうと思う。少年は抵抗しなかった。単純にパパを信頼していた。苦痛や叫びの記憶はない。おそらく歯をくいしばって涙をこらえたのだろう。きつうんと穏やかな折檻だったのだ。恐しいことだった。両親にとってだってこわかっただろう。（ほとんど熱病やみのようだった）」
(T 962)

歯車がかみ合わなくなってしまったこのような家庭を厭わしく思わない子どもがいるだろうか。「家族のふところは少しも居心地がよくなかった。むしろ軽蔑していた。どんな場合でも客観的に評価していた。」(T 959) 驚くべく幼いときからすでに、ムジールが家を出たいと激しく独立を希求するようになる、心の諸条件が確実に準備されてゆくばかりである。

《子供部屋の憂愁》⁽⁶⁾

「残念ながら雨！ —— カーテンを引いてまっさきに朝を発見する、そしてこ

(54)

のことばが窓辺からかえってくるやたちまち、部屋全体が変貌してしまう。家具がみんな意気消沈する。部屋全体が沈没する—といった方がふさわしいかもしれぬ。が、次には再び抛り所をつかむ。快晴という状態の下数メートルのところで部屋は再び堅固になる。オマエハイマコドモジダイニカエッタノダヨ。雨が降っている。庭や路上の遊びから、犬のロードがいる門から、冒険の数々から締たされてしまった。しかし深い失望の幕が閉じるやただちに、ふたつめの幕が開いた。そこにあるのは、本物のポイントや信号のついたレールを走る小さな汽車の遊び。……本物の火薬をつめて射つことができる、大きな大砲そっくりで作られた小さな大砲……そうだ、さいころと競馬の遊びもあった。馬場は障害ともども絵に書かれているが、馬と騎手は色のついた錫の鋳物でできていた。それは何の変哲もない子供向きの競馬遊びだったが、ひとつだけ特別なことがあった。つまり私はいつも栗毛と6のコースに賭けた。その第1の理由は、赤が私の好みの色で、11月6日生まれだから。第2の理由は、私の子供の頃、父はいつでも茶の馬に乗っていたが、若い頃に持っていたという紅栗毛のことを熱心に話してくれたからだった。父の昔の馬は激しく乗りまわされると、雉の羽のような黒っぽい色調になる栗毛だったという。それでくり返し栗毛と6のコースに賭けたのだけれど、本当に私が好きだったのは、5のコースに置いた黒毛だった。何しろ5という数は私の不吉な数だったのだから。」(MoE 2023)

子供の頃お気に入りだった遊びの閑かな回想から始まったこの引用(『家族の発見』1926年、『特性のない男』へ挿入するために書かれた)の終りの部分は、また暗示めいている。別な回想では次のようにも記されている。

「怪しげなこと。幸運の数6の由来は、11月6日が誕生日、6月6日が長く私の聖名祝日にあたっていたから。幸運の色、赤は、父の馬の話による。乗馬の際に父は、栗毛とりわけ紅栗毛に格別の愛着を持って選んだという。<ナルシズム。自己愛あるいは遠い愛?> 競馬遊びを思い出す……6よりも5を賭けた方が勝つことが明きらかになった。それは混乱をひき起し、今日に至るまで安らかにならないのである。」(T 910)

ムジールにとっては不吉な数なのに実際は賭けの勝ちをもたらしてくれた<5>は、彼の秘めたるライバル、姉のエルザが死んだ12月5日に由来すると、K. コリノは指摘している⁽⁷⁾。

(7) K. Corino, a. a. O., S. 145.

馬についてはまた、こんな回想もある。

「シュタイアのキルヒベルク。大きな（おそらく）黒い若駒。それが（おそらく）戯れて鼻づらを私の胸に押しつけるか、嚇すかした。狭い小路で逃げることもかなわず、建物の壁にピタッと押しつけられたときの私のぞっとするような恐怖。そのときの驚愕も作用したのだろう。長い間馬への（否、動物への）恐れとして残った。このような瞬間の後遺症はかくも決定的なのだろうか。（その理由は主に、父にはそれができるはずなのに、私にはすぐには馬とのつき合い方を教えてくれなかったからだ。）」（T 936 ff.）

馬や動物への恐れは、S.フロイトの『ある五歳男児の恐怖症分析』⁽⁸⁾のなかで、＜去勢不安＞と診断されたものである。しかしムジールの場合、先に引用した『家族の発見』でもさらに馬をめぐる話を続け、そのなかで恐怖よりも、期待に胸を脹ませてむしろ、馬を待望した自分を語っている。

「母の従兄のひとりがあるとき、私に彼の持ち馬の1頭をくれようと約束した。……私は唐突にいったのだった、＜ヘルマンおじさん、ぼくに一頭おくれよ。＞叔父もすばやく、深く考えもせずに応えた、＜いいとも、だけど馬がクタバルまで（……, bis es umgestanden ist.）, 待たなくちゃいけないよ。＞叔父はほんの冗談で私をからかっただけだったのだ。が、私はその語調から大乗り気という感じだけを聞いて、条件を理解しなかった。叔父の多くは馬術家や狩猟家で、私が意味を知らない言い回しをいくつもした。それでクタバル（umstehen）というの、まもなくやっってはくるけれど、私に渡されるようになるまで待たなくてはいけない馬に何か関係のあることばだと考えた。私がどれほど幻滅を味わったかを知るのはいくらも重要だろう。だが、実際棚ぼた式に思いもかけない贈り物を貰ったことは今でもよく覚えているのに、幻滅のことはもう思い出せないのだ。というのも、私は馬が猛烈に欲しいと頼む努力などさらさらしたことがなく、頼むまねを1度してみたいとちょっと考えただけなのだから。それにふさわしいことばを探しても、決して見つからないだろうという感じがする。……こんな風になら言えるだろうか、1枚は現実のなかへ、1枚は私たちのなかへ引き込まれる2枚のカーテンが、同時にさっと引かれてしまったような……と。腹わたへ食い入るほどの馬と＜私＞の一致が生まれた。けれどそれは、狂気と正気の境いのように意味がないわけではない境界が消えてしまったことを、表わすには頼りないことばである。」（MoE 2023 ff.）

(8) フロイト、『ある五歳児の恐怖症分析』、高橋・野田訳、フロイト著作集第5巻、173頁以下。

馬そのものとムジールの関わりよう、あるいは馬を現実に所有するかどうかという点よりもむしろ、〈馬を持ちたい〉という願望がどれほど強く保持され得るかというところへ回想の力点が転移している。少年ムジールは息をつめるようにして願望が成就されるか否かを待った。それはまた夢想到に満ちたときでもあった。待つことがあまりに強烈であったために、願う《私》と対象が密着し、ついにはそれらを分かつ境界線が消滅するほどに熱く一体化してしまった。が、叔父にからかわれたと分かるやいなや、まっふたつに引き裂かれてしまったような気がしたというのである。この場合ムジールにとって願う対象が必ずしも馬でなくてもいいように取れないでもないけれど、他ならぬ〈馬〉への期待感だったからこそ、彼の待望感に濃密に凝縮したのではないだろうか。馬に関わる回想には濃く父の影が落ちている。馬はそもそも男性的なものの象徴である。今母に対して無力な父が持っている茶色の馬よりも、かつて（おそらくは少年の想像のなかで父が潑刺として若やかな頃に）所有していたという赤い栗毛に対するムジールの愛着は、父への共感的な憧憬が反映してはいまいか。若く強い父への渴望が。そして他方黒い馬は無防備の幼いムジールを驚愕せしめたにとどまらず、あくまでも推察の域を出ないのだが、遠乗りを共に試みたこともあるであろう母の友人ライター（〈騎手〉という名前も意味ありげなのである）の持ち馬でもあったのではないだろうか。K. コリノの指摘のように、不吉な数「5」の由来が姉エルザが亡くなった日に依るものだとすれば、子供の頃の競馬遊びの際には、5と黒毛の組み合わせが不吉だけれど、実は6と栗毛のそれよりも強いので好きだったというムジールの心の謎を、先の推測はマゾヒスティックな屈折とみなすことを可能にする。叔父が約束した馬への待望がしだいに高まるにつれて、ムジールのうちには常は強者と認定しているものへのライバル意識、挑戦、勝利の夢想もまた高まった、それが手に入らないと知るやもろともに失墜してしまった——ムジールの夢想癖は私たちをそんな想像へも誘ってゆく。

1886年—1890年

シュタイアの小学校に在学。この4年間あらゆる科目で最高点の1を得る。3年生の後期つまり1889年1月から6月まで、〈神経と脳の疾患〉で休学し、個人教授を受ける。4年生の前期の後半は脳膜炎で23日間、後期は神経症で42日間、登校することができなかった。(LWW 206)

1890年9月—1891年1月

シュタイアの理工科ギムナジウムに在学。(LWW 206)

学校制度としての理工科ギムナジウムはすでに廃止され、ムジール入学当時は名ばかりが残っていた。帝国内有数の工業・商業都市としてのシュタイアの要請に応じて、シュタイアの理工科ギムナジウムは初等実科学学校へ変わった。当時人口約18,000人の町にギムナジウムはなかった。ムジールの次の滞在地ブリュンでの1年とあわせて2年間、ムジールは軍ではない民間の初等実科学学校へ通ったことになる。実科学学校では人文科学分野の科目と自然科学分野のその比率が、ギムナジウムの6対4と違って、4対6であった。外国語も教養としてのラテン語やギリシャ語ではなく、実際的な現代外国語教育が目標とされた。そして文学の講義はドイツ語だけに限られ、外国語のそれはなかったという。(Vgl. SM 20 ff.)

《スタンダールの体験 あるいは 性の目覚め、ロマンティック、詩的》⁽⁹⁾

「5歳から10歳までのいつの頃だったか、私が燃えるように高貴なことを夢想していたとき（あるいは友人たちの話や母の戒めのせいだったのだろうか。しかし私は実行衝動を持っていたのだと思う。なにしろ私は当時幼稚園から女の子を〈誘拐〉しさえしたのだから）、私はあらゆる喧嘩に首を突込んだ。あるときは、ゆうに3歳は年上の〈大男〉に勝った。この男はひょろひょろと背の高い少年だったと思う。その喧嘩のあった場所、取っ組み合って私が相手を倒したので、相手と談判に入っていたのだが、何を始めるべきか私自身全くわからなかったことなどを今でも思い出す。私がいつも取っ組み合いをしていたこと、好きでもなく、感

(9) T 316; P 938.

激もなくただこぶしを振り上げていたことは、私の特徴を示しているようだ。私は小さくずんぐりしていて、腕は短かった。クラスではいつも最年少だった。あるとき学校からの帰り道、級友の兄で2、3歳年上らしいのと口論になった。これは私も驚いたが、私が地面にひっくり返って急遽終りとなった。私は恥かしさと怒りでいっぱいになったが、仕返しする勇気はなかった。勝ち目はなく、ことは目に見えていた。」(T 915 ff.)

<実行衝動>から出た双葉のひとつ、少年ムジールの喧嘩早さに表われる攻撃性——これは次の短いブリュン時代にも顕著だ——は、「母の激しさの反映であり、どこか敏感な自意識と関り合っていた激しさ」(T 916)の外界への具体的な表われであって、家庭内でのあの母に対するむき出しの反抗心と対応しているようにみえる。しかし何のための戦いなのだろう。後にブリュンでめぐり会う友人グストルは、ムジールには「たちの悪い子供の乱暴は全く無縁でした」(LWW 207)と伝えている。そして夢想された高貴なこととはどのような内容なのだろう。『特性のない男』で父の訃報で帰郷したウルリッヒが、一夜明けた朝ふと幼年時代の回想へ誘われる場面が、私たちの想像の助けになるかもしれない。

「それは女の子についての体験だった。その女の子はただふたつの特性だけを、つまり彼のものにならねばならぬという特性と、その故に彼が他の少年たちを相手にたじろがなかった戦いの特性だけを持っていた。このうち戦いだけが現実のものだった。というのも女の子は存在しなかつたからである。奇妙な時期だった。彼は遍歴の騎士のように未知の敵を求め、自分より大きな敵に、人気のない秘密をはらんだ道で出会うと、喜々として相手に飛びかかり、不意をうたれた相手と格闘したのだった。……どういふ結果になろうとも、彼はいつも満足が裏切られるような感じをもった。そして彼の感情は、自分が実際に知っている少女たちが、自分が守って戦った少女と同類なのだという明白な観念を受けいれないのだった。」(MoE 690)

遍歴の騎士と、彼が身を賭して守らねばならぬ貴なる姫君の比喩は、幼い少年の夢想としては十分純粹にロマンティックなものだろう。小説の主人公では貴なる姫君は妹アガーテを媒介にして突然女の子になりたい憧れに変容するが、作者ムジールは現実には少女誘拐へと飛翔する。

この行為はムジールの幼時体験のなかでとりわけ強烈な位置を占めているようだ。少女はカロリーネといって、ムジールの当時の住居からほど遠くないところに住んでいた事務職に従事する男の娘だったという。(Ta 789) シュタイア在住の頃にそこで起った大がかりなストライキを後に回顧しつつ歴史的・社会思想史的に位置づけようと試みながら、ムジールは派生的に自分のシュタイア時代を思い出して、ふたりの女性のことを連想する。ひとは炭鉱会社社長の娘ギーゼラ・エッカーに関連して、「一方ではギーゼラには少年のエロティシズムのようなものが結びついている、＜女を持ちたい＞という願望をともなつて。この願望は私にだけ特別なものではないであろう」と述べる。もうひとは例の＜誘拐した＞カルラ。「無垢と同時に愛の欲求。エレクション、そしてカルラとの恋愛ごとの問題。これは必ずしも精神分析学の教義どおりではない。」(T 1006) これらのことばは、後の心理学者ムジールの視点からのものという限定を加えても、少年の心と肉体には早ばやと性が訪れ、意識をゆさぶっていたことを告げている。

別な回想でムジールは先の＜クタバッタ馬＞のエピソードを再引用して、所有の夢想が高まってついにはファンタジーのなかで欲望の対象と＜結婚する＞と述べた上で、さらに他の欲望について例示する。「庭に独立した自分の穴居を建てたい思いにとらわれた。それから武器が欲しい、何よりも先に鹿のつもの、次にゴム製の警棒、たぶんレヴォルバーも、＜童話のように力が盛々つくために＞欲しがったかもしれぬ。次にくり返し表われた目眩く輝かしい思い、＜おまえはぼくのものだ＞。自らの持つもの全てを備えたひとりの女を持つこと。」(T 949) 武器がことごとくペニスの象徴であるのが作り物めいているけれど、カルラの＜誘拐＞はもらえなかった馬の場合とは逆に、この種の願望を成就しようと思いついて一歩踏みだした行為、閉ざされて燃えるファンタジーのなかだけでの我と対象の幸福な一致を越えようとする行為と考えられる。もちろんそこでは、ムジール最初の小説的構想『小説のための覚え書き』(T 38 ff.) ——これが『特性のない男』のそもそもの萌芽といわれている——におけるローベルトのベルタに対する

(60)

態度のように、異性に対する秘められた、しかし執拗なエロスの探究心も働いているのだと思うが、もう一方では少年は大人が家を構え妻を持つように、子供らしい城と武器を持ちたいと夢想し、わけてもひとりの女の全てを所有したいと熱望しているのである。貴なる姫君の上を舞っていた夢想が突詰められたもう一方の極では、女を純粹所有の客体と考える、男たちの共有する気質が強固な構えをみせている。ムジールは一夫一婦制と自分の関係を女の子が人形と結ぶ関係と比較できまいかとすら述べている。(T 945)

既にムジールのひそかなライバルとしての姉エルザに触れた。その先を続けてムジール自身は「(姉のことを) 私はもちろん、時には女の子になりたいとも思ったあの<ブラウス時代>の思い出から語っているのである。私はそれをエロティシズムの重ね合わせと考えたい」(T 953) と述べている。ムジールは少年の頃に女の子になりたい願望を抱いたと、『士官候補生テルレスの惑い』(P 93), 『特性のない男』(MoE 690), そしてそれに先行する草稿『アンデルス』(T 612 ff.) で3度にわたって書き表わす。『アンデルス』を訳出してみよう。

「彼はとても男らしい男だった。筋肉たくましく、大胆で、冒険を好み、慎重で、何人もの女をものにする女たらしだった。が少年の頃、まだ女の子を服を着ていたときは、ひそかに女の子になりたいと願っていた。このような瞬間には、開くことのできない奇蹟の間のドアに寄りかかっているような感じだった。その年齢ではまだ性の区別がはっきりしなかったので、現実は確かに克服しがたい妨害ではあったけれど、また肉のように血の暖かなそれだったので、いかにしたら女の子になれるか、具体的な方法を思索したわけではないが、願望だけが突きぬけていった。あの頃彼が自分のなかにも持ちたいと思った少女の魂が、彼のなかの少年の魂に憧れ、数分あふれ流れ出したのかもしれない。彼は男としてではなく、女として女に欲望したのだった。後に彼が初めてほんとうに惚れ込んだとき体験したことがそれに類したものだろう。愛のこの<寛容さ>——姉妹性、そして自我の両極性の消失など。さらに類似のことは、どんなに性的体験を持っても、彼にとっては姉という観念が奇妙な魔力を持ち続けたこともである。」

以上引用したムジール自身のあまたのことばによって彼の幼年期を再構成してみると、ここに少年の夢想の世界がぼんやりとした輪郭を浮かびあ

がらせてくるだろう。全ては形と実質を得るのを待つ前存在のように未分化のまま混沌としている。エロティシズムの重ね合わせだという姉へのコンプレックスは、いまだ形成されていない自我のナルシスティックな亀裂の様相である。また姉への愛着と緊密な表裏をなす、女の子への変身願望には、一種のヘルムアフロディスム的まどろみが反映している。もちろんこのヘルムアフロディスムは退嬰的、病的な意味ではなく、少女の魂が少年の魂に憧れ出ずるように性がホモとヘテロへ分化する以前の若々しい幸福な合体への憧れの意味でとらえるべきである。このような神話的なまでの性的願望を満たした気圏から、『特性のない男』における愛の極限の実験者ウルリッヒのパートナー、少年のようにほっそりとした妹アガーテの形姿が浮かびでてくる。他方この合体願望の対極に位置する、女を酷薄なまでに所有物視する冷やかな態度は、例えばウルリッヒとポーナディアの関係のなかに典型として表われることになるだろう。

以上のような未分化のカオスの性的夢想を、ムジールをとりまいていた現実と照応させてみれば、外界には母という女性の関わる男性がふたりいるという三角形の構図がある。両親から、ひとつの性がひとつの異性と営むヘテロ的性の役割をムジールは明確に感取しなかった。しかしそれにもまして私たちのなかに哀切な印象を残すのは、陽のあたる戸外の喧嘩早い激情的な少年と、部屋のなかの夢想的な孤独な少年の鮮やかなコントラストである。時には神経症的発熱でベッドに就かねばならなかったムジールのひとりぼっちの子供部屋は、彼のロマンティックな幻想を縦横無尽にはぐくんだもうひとりの母であったに違いない。

1890年10月

父アルフレート、ブリュン工科大学の機械学、機械製造および理論機械学担当の教授に任命される。(LWW 200)

1891年春—1892年6月

(62)

ローベルト、ブリュンの高等実科学学校に在学。

この地でムジールは、グストルの愛称で呼ぶ友人グスターフ・ドナートを知る。ふたりの父親がともにブリュン工科大学の教授であるところから、家族ぐるみで親しく交際し、住居はいつも隣り合っていて、引越しも3度いっしょに行なうほど親密だったという。(RMS 318) ローベルトとグストルは、<精神的なふたごの兄弟> (T 909) として、相互に競うように切磋琢磨しながら、少年期と青年期をともに過した。グストルは『特性のない男』ウルリッヒの幼な友達、熱烈なヴァーグナー崇拝者ヴァルターの塑像といわれている。ムジールの記述を読む限りで、グストルは早熟で、知識欲も活発な少年であつたらしく、ムジールをリードし誘うような形から友情が始まったようである。ことに後年士官学校で5年過したムジールと、ギムナジウムで古典語や哲学、美学の基礎を学び、おまけに音楽狂だったグストルの再会は、ふたりのそれまでの人間形成の差をムジールに痛感せしめずにはおこななかった。

少年時代、ふたりは鉛の兵隊を持ち、おもちゃの大砲へ豆をつめて木製の砦を射つなど、男の子らしく戦争の真似ごとをして遊んだ。(LWW 207) が、大人ではなく、自分と同じ年頃の親しい友人を得たとき、まず最初に子供のすることは、覇がかかったように不鮮明な大人の世界を斜かいに見やりながら、しかし自分が探り当てたと信ずる生の秘密を打ち明けあうことではないだろうか。ムジールはすでにシュタイアの時代に性へ眼を開かれていた。グストルは証言している。「彼がブリュンへ来たときはもう、心に幼ない恋人を秘めていました。この想いの相手、カルラ・Rは彼の内面の神聖部となっていました。そして彼自身ここに触れることは滅多になかったし、他の人が話題にするのにも我慢がなりませんでした。」(LWW 260) しかしムジールが予感のなかに育くんでいた性の観念から、最初にその覆いを取りはらったのはグストルのようだ。『小説のための覚え書き』のなかの一場面。熱病の発作で学校を休んでいるローベルトを(事実ムジール

はシュタイア時代と同じように、34日の欠席がある)、グストルは見舞い、ひとしきりおしゃべりをする。

「<興奮するんじゃないよ。ぼくの話はまだ終わっていないのだから。よく注意して聞いてくれよ。きみは赤ん坊がどうやって生まれてくるか、知っているかい>と彼は言った。<こうのとりが運んでくるなんていうのは作り話だと前にパパが言っていたけれど——そんなことあり得るはずがないじゃないか——、だけどぼくはまだゆっくりと考えたことがないんだ。>そこでグストルは説明を始めた。グストル自身ははっきりとは想像できない、それだけに燃えるようなことばでとても素晴らしいことなのだと描いてみせるあること、自分で実際に女の子とやったと言い張っているあること——その周囲を、彼のことばは曖昧に秘密をはらんで揺れた。彼はローベルトが病気の間、学校で級友からその秘密を明かされていたのだった。グストルが帰って夜になったときようやく、彼は聞いたことの重みをずっしりと受けとめた。グストルの話をはっきりさせようとしたが、無駄だった。その頃クラリッセと体験した以上へはゆかなかった。彼のファンタジーが呼び集めた(点火した)焰はこの点でいつも内面へ帰ってゆき、頭脳は拒んだ——炎に焼きつくされたように。」(T 43)

ローベルトはグストルという刺激的な友人を得て初めて、ファンタジーのいっぱい満ちた、閉ざされた少年の魂を共有し得るパートナーを見つけた。それによって孤立した絶対的な少年の夢想には、相対的思考の視点が開かれてきたといえる。親密な友情を見出しはしたが、それすらも少年ムジールのなかで飽和点に達しようとする自立の欲求、家を、両親のもとを離れたいというやみがたい熱望をとどめることはできない。

1892年8月29日—1894年9月1日

ブルゲンラント州の州都アイゼンシュタットにある士官初等実科学校に在学。

12歳にもならぬうちに両親から遠く離れた全寮制の、しかも軍人養成を目的とした荒っぽい雰囲気のある学校へ入学した動機には、後年ムジールの後悔、無念の思いが濃く反映していてその語り口は重い。少年のなかに騎士

(64)

的高貴さへの憧れがまだ残っていて、それも軍人へ駆った要因だとしたら、幻滅はどれほど大きかったことだろう。動機として明確に述べられているのは、母ヘルミーネへの猛烈な反撥と、幼ない自分自身の誇大妄想的な独立への願望である。母との神経症的な激しい応酬を述べた後に「私が10歳の頃このような場面がエスカレートしたので（私たちの場合そんなとき、知的プロテストもあったのだろう。私は私の＜精神的な＞自立が欲しかった。が、私には子供らしい可愛いところがないというのが返ってくる非難であった）、3人全員一致のもとに私はある施設へ預けられた」（T 935）と回想されている。さらに詳細な回想を見てみよう。

「決定的な転回点、アイゼンシュタット。私は長いズボンを着けたかったので、ゆきたいと思った。パパは叔父ルードルフのことを考え、また、私が19歳半で少尉になり、自分で食べてゆけるし、ポケットマネーのゆとりもある。将来を保障された、恵まれた人間になると計算もして賛成した。ママは全部が全部私の思うがままにさせてはいけないという考えを持っていたようだった。ママはおりおり厳しく、あるいは激しかった。それが私の少年らしい誇りを傷つけ、嵐のような反撥を呼び起した。私はしつけを受けいれなかった。力づくでなどはもってのほかであった。そこで私たちは全員、別れて暮そうという点で一致した。ところがそれが現実のものとなるやいなや、私はアイゼンシュタットで激しいホームシックに襲われたのだった。気性の激しい子供だった。」（T 961）

少年の高潔な誇り高さはいったん決意して、踏み出した道を、全く思いもかけずこみ上げてきたホームシックの故に、引き返すことをとてもしなげよしとはしなかったであろう。

1894年9月1日—1897年9月1日

ブリュンに近いマーリッシュ・ヴァイスキルヒェン（現在チェコスロヴァキア領でラニチェと呼ばれている）にある士官高等実科学学校に在学。

《テルレス前史》

ムジールが生涯に渡って変わらず、意志的に規則正しく肉体を鍛練することを怠らず、またスポーツ全般に対する深い興味を隠さなかったことは

知られている。そのような傾向はこの5年間の学校生活のなかで培われたものに違いない。他方、この5年間の回想するムジールの視点は、単にそれが自己形成に果たした役割の考察に対してのみあるのではない。この種の軍人養成の制度、施設のありよう、およびそのなかで起ったことがかつてのハプスブルク帝国末期において持った政治的、歴史的意味を問うところにも据えられている。

「<二重帝国の軍人教育・養成施設>の描写——古典主義終焉後のシュティフターの表現?——は、生徒が後世の政治に持つ重要性を度外視しても、奇妙なものといって余りあるだろう。テルレスにおいては変形。

真実——このような施設はフランツ・ヨーゼフ時代のものなのか、あるいは起源もっと古いのか。それと関連して他にも、例えば士官は男らしさから生まれはてくるべきという原則のごときものも問題だった。1848年? 国境監視員の精神? 昔の幼年学校と同じ根本理念? 比較しつつ検討しなおさなくてはいけないだろう。スパルタ的とでも言うておくことにしよう。今日たまたま突然に、アカデミーでたくさんの砲兵隊士官にとり囲まれていたさまを思い出す。色鮮やかななかに落ち着いた軍服への愛だ。が当時はそんな愛は感じていなかった。アカデミーは例外として、教育は非常に下士官的だった。補助教官、教室付きの曹長(この男に対する私の敵対)。制服と靴の類。全く合わないパレード用の軍服、筆舌につくし難い学校用の軍服。囚人よりもっとひどい。洗面所と便所。あわせて、方々で生徒が体操しているアイゼンシュタットの校庭の光景も思い出す。今でもなお私がきれい好きなのは過度の代償作用か。それにしてもなぜ両親は反対しなかったのか、今だに不可解である。人間なるかな!」(T 936)

1848年以降、つまりヴィーンの3月革命とメッテルニッヒの英国逃亡、そして10月革命の挫折とフランツ・ヨーゼフ I 世の即位以降、ハプスブルク帝国では漸次学校制度の改革が進められてきた。ムジールが在学した士官実科学校は、軍人養成のシステムを変えようという動きの結果であった。しかも1859年にオーストリア軍はフランス、イタリアを相手に戦い敗れて、ロンバルディアを失い、また1866年には新兵器を備えて再編されたプロシヤ軍に敗北し、軍は深刻な打撃を受けた。それが制度の改革へいっそうの拍車をかけた。古い<軍人教育施設>や<幼年学校>は士官実科学校に吸収され、1874年には消滅する。その年になされた決定によれば、「(非軍人のた

めの)実科学校の教育課程に基いて、あらゆる兵科の士官を養成することが最も目的にかなうものである」とあるように、士官実科学校では伝統的なギムナジウムとは異なって、自然科学教育に重点をおいた実科学校と等しいカリキュラムと教科書に従った教育がなされた。もちろん、軍人を育てることが、直接目的であるから、軍事教練の時間がもうけられるなど相違もあるに違いない。が、精神的自立を目指した少年ムジールをとりわけ耐え難く苦しめたのは、教師たちを媒介に伝わる軍隊特有の古い体質、精神的風土ではないだろうか。加えて学校は生徒たちに、都市から離れ、文化的刺激も乏しい地方の逃げ場のない寄宿舎生活を義務づけているし、建物の設備は言うに言われずおぞましいのである。ムジールがふたつの学校に在学当時、非軍人の教官は皆無であった。文学や芸術の学習も軍人にふさわしいモラルと祖国愛の高揚に加担する内容であったから、徹底して狭い意味の軍人の典型を作り上げるのに寄与した学校制度といえる。(Vgl. SM 17 ff.)

ムジールはこの学校を通して、制度改革によって阻止し得なかった軍隊の退嬰化を見た。あわせてそこに着実に滅びに向かってゆくハプスブルク帝国の末期の姿も看取した。そしてこれらの学校から巣立った士官たちが、第1次世界大戦開戦から帝国の終焉に至る歴史的過程のなかでさらけ出す無能ぶり、その付けはさらにヒトラーのオーストリア併合を許容するところへも回ってゆくのを、ムジールは痛恨の思いで認識せざるを得ない。

「テルレスの真の物語——ラニチェ。これはさらにフランツ・ヨーゼフ時代のひとこまでもあるだろう(ゲートル、古い軍靴)。蛮行の1物語、適宜修正を加えれば、ピルズドスキーやケマル・パジャなどのごときタイプの前史。いずれにしても大いなる変革前最後の時代の物語。(A. ヒトラーの同時代者)」(T 955)

1897年 9月

ヴィーンにある、陸軍工科アカデミーへ入学。特に弾道学に興味を持つ。

1897年12月

士官養成教育を受け続けることを放棄する。

「メーリッシュ・ヴァイスキルヒェン——ラニチェ（くそくらえ！）。騎兵隊志願生と士官高等実科学校生徒。テルレスの真の物語。軍人教育における古い下士官精神。アカデミーはそれと格段に相違。突然のつらい訣別（T 953）とあるように、ウィーンのアカデミーはムジールの精神の誇りの高さにかなっていたようにみえるのだが、突然それまでの経歴を中断してしまう。その間の経緯をムジールは簡潔に述べている。

「職業軍人になるべく定められていたが、砲術を研究しているうちに、工学的な才能を発見した。突然決心をして、将校不合格になる前に士官養成の学校を去り、ブリュン工科大学で機械工学を学ぶ。」（P 949）帝都ウィーンが若いムジールの心にかなわなかったのだろうか、再び両親の庇護のもとに休らぎたかったのだろうか、他にいくつかの心理的な動機もあったに違いない。が、決定的なのは、工学への興味を発見したことが、女と馬のことしか話題がなく、精神性にも欠けていた軍人の世界を脱出するこの上ない機会となったことだ。ところで、その時点で実科学校の卒業生が総合大学へ入学するためには、ギムナジウムの全科目を学ばねばならず、そのためには、実際にギムナジウムに入学しなければならなかった。1904年、実科学校で開講されていない科目の追試験に合格すれば、実科学校卒業資格で総合大学入学手続きの権利を有するという法律が公布されてようやく、実科学校卒業生に総合大学入学の道が開ける。遅まきながらムジールもこの年すでにベルリン大学の聴講生ではあったけれど、追試験を受けて正式に入学手続きをとることができた。（Vgl. SM 25 ff.）

したがって1897年に工学研究へ転向したときは、工科大学へ進むのがもっとも容易な方法であった。何はともあれ、この人生最初の進路変更によって、ムジールは両親の住むブリュンへ帰り、その地で文字通り彼の青春時代を生きることになるのである。

1897年1月—1901年6月

父アルフレートが教鞭を取っているブリュン工科大学機械工学科で正規

(68)

の聴講生となる。

1901年7月

技師国家試験に合格

1901年10月—1902年9月

ブリュンを衛戍地とするヘス男爵指揮二重帝国陸軍第49歩兵連隊に1年志願兵として入隊。

《ブリュン》

ブリュンは辺境領モラヴィアの首都。1900年頃の人口108,892人。ドイツ人とチェコ人の比率は約70対30であった。《ウィーンの文化的郊外》と呼ばれたように、あまりにウィーンに近すぎて、例えばボヘミアの首都プラハに比較し得る独自の文化の中心地になることはできなかった。だが他面、時代を先がけるウィーンの新しい芸術の成果をどこの都市よりも早く積極的に受け入れた。(Vgl. SM 47)

5年ぶりに再開したブリュンの日々は、工学研究に従いつつ、ムジールが文学への真摯な傾斜を次第に深めてゆく過程でもある。さっそく幼な友だちグストルや文学、演劇志望の若者たちとの活発な交際が始まった。が実科学校、それも軍人養成を目的とした教育環境にいたムジールは、古典的教養主義のイデーのもとに育ったグストルらギムナジウム出の若者たちのなかで異人種という自己認知をせずにはいられなかった。グストル、「ヴァーグナー崇拜者は音楽にのめりこんだままだった、理論家として、教師として、作曲家として。それが彼の職業になり、人生の内容になっていた。一方、ムジールは審美眼のないものと思われていたかもしれない。」(RMS 316) ムジール自身、「17, 18歳のころ——おそらくは乱読の影響下にもあって、それは<野蛮人>から文化への移行期だった」(T 949)と、回想したように、<野蛮人>と自己規定さえしたのであった。この意識はムジールの

精神生活には決定的だったとみえる。後に心理学を学ぶことになるベルリン大学の学友 J・G・フォン・アレッシュに対するときも、かつて自らが<半野蛮人>という感情をもったことを思い出す。主として教育課程の相違がもたらしたこの異和感を、ムジールが積極的に押し出そうとすると、彼等を<美的に繊細な人間のタイプ>、自分を<道徳的に繊細>と一線を画している。(Vgl. T 153)

新しい仲間との出会いは、とりわけ若い人間にとっては思想との出会いにもなる。ムジールは一時社会主義思想にも接近してゆく。「ブリュンで私を社会主義に共感させたものは、もちろん理性的考察も重ねたけれど、若い男の単なる現実遊離の姿勢だったと思う。その共感の結果、私の文学的デビューは《大衆の友》の劇場批評家から始まるどころだった。ちょうどこの時、劇場運営委員会が新聞の批評家専用の席を廃止してしまったのだ。運命のいたずら！ チェック議員⁽¹⁰⁾訪問、労働者集会所での講演——かびくさい雰囲気。ここでも美的な要素は反感を呼び覚ました——決定的に。」(T 915)あるいは「17歳から20歳まで、ゲンツの原理にもろに傾く」ということばも見られる。当時ハプスブルク帝国内には帝国の改革を求めさまざまな動きが、いっそうラディカルな様相を呈していた。キリスト教社会主義は、革命的社会主義や社会民主主義へ変容を遂げつつあった。とりわけ北ボヘミアの石炭地帯やブリュンの繊維工場、ピルゼンなどの鉄鋼、石炭産業において、それらラディカルな社会主義が活発に動き出していた。この運動は国際的な階級意識に基づいて労働者の国際的連帯を希求しているが故に、例えばスロヴァキア人のように民族からなる連邦制国家

(10) ルドヴィーク・チェック (1870-1945), 弁護士, 1918年チェコスロヴァキア社会主義労働者党議長, 1920年-1938年, チェコスロヴァキア国会議員, 1929年から38年の間に数回大臣を務める。(Ta 684)

(11) フリードリッヒ・フォン・ゲンツ (1764-1832), 政治的ジャーナリスト, はじめフランス革命に共感するが, 後にエドモンド・バークの影響を受け, その『フランスにおける革命の考察』(1793)を翻訳し, 補足した(ベルリン 1794)。そして英国とイギリス自由主義の同調者となった。1809年メッテルニッヒの協力者として, 王権復興推進の代表者となり, 時代の自由でリベラルな思潮に敵対した。(Ta 684)

を主張する熱烈な民族意識と相いれなかった。1900年秋にはブリュンで、社会民主党全体会議が開かれて、その異なるふたつの意識の調整など激しい議論がゆきか⁽¹²⁾つた。こんな風にしてオーストリア本国それ自体よりも、ハンガリーやチェコスロヴァキアなど周辺部がむしろ、世紀転換期の政治的諸思潮の生き生きした坩堝になっていた。若いムジールはそんなゆれ動く時代の思想のダイナミズムに身をまかせてみたのである。束の間、ゲンツのような行動する政治的ジャーナリストを夢見たこともあったかもしれぬ。しかし社会主義思想はムジールの生涯の同伴者にはついにならなかった。彼は後にふりかえって「ブリュン（老獣オーストリアの知恵）。共存。緩慢な瀟過作用とその他の諸原則（たとえば教授選出）。老獣の知恵が扱いかねたもの、チェコ人、自信に満ちた社会主義」（T 953）と鮮やかにブリュンの本質をとらえている。革命的演劇評論家ムジールは誕生しなかったが、彼がどれほど劇と劇場へ意欲を傾けたか、それはアリストテレスの『詩学』を熱心に学習した跡（T 54 ff.）が、証明している。

なお、ブリュンの市立劇場について付言すると、当時はA.レヒナー監督のもとで1300を越える座席がいつも満員というほどの活況だったという。彼はウィーンのブルク劇場客演の舞台作り全てを引き受けたし、また古典劇から肩のこらない軽い喜劇、オペレッタまで巾広く手がけた。現代演劇に対しても拒否的ではなく、イプセン、ハルトレーベン、ホーフマンスタールなど若い世代の作家たちの作品を積極的に上演する意向を明らかにしていた。さらにつけ加えるべきことは、ブリュンではコンサートが聴ける機会がきわめて少なく、この市立劇場で催されるものが市民の音楽生活のほとんど全てとあってよく、1893年から1899年にはヴァーグナーの全楽劇が上演された。ムジールがあやうく演劇評論家になったやもしれなかった時期には、ズーダーマン、G.ハウプトマンの諸作品、ホーフマンスタールの『出口と死』、『恋愛三昧』などシュニッツラーのもの、ヘルマン

(12) Hugo Hantsch : Die Geschichte Österreichs. 2. Bd. Graz 1968, S. 449ff. 参照。

・バルルのヴィーン的情绪をたたえた『星』などがかった。同時にイブセンやビョルンソン初期の社会的ドラマも演ぜられ、また地元ブリュンの若い自然主義作家フィリップ・ラングマンの『バルテル・トゥラーザー』は当たった作品だったという。(Vgl. SM 47 ff.)

ところでムジールと友人たちの文学活動を見てみよう。興味深い当時の新聞広告が発見されている。1900年3月20日づけの『ブリュン新聞』である。「——ドイツアカデミー 読書協会講演会——このシリーズ最後の公開講演会としてドイツアカデミー読書協会は、ドナート、エーレンシュタイン、フロイント、グリュエネフェルト、ムジール、パヴェル、シャーマン、シック諸氏の協力で、《ブリュン作家の夕べ》を計画している。会は23日金曜日午後7時に、モラヴィア織物博物館（エリーザベット通り）の講演の間で催される予定であり、上述の諸氏がそれぞれ自作の作品を発表することになっている。……」(Ta 10) この会それ自体は、他の新聞によれば、開催寸前にとりやめとなったもようだが、この広告はブリュンの文学的雰囲気、それへのムジールの関与ぶりを少しく伝えている。

ブリュンにはこの講演会を主催している《ドイツアカデミー読書協会》の他にふたつ、同種の文学集団があつて、祖国モラヴィアに独自の精神生活を育てようと啓蒙的な活動を行なっていた。そのため具体的にベルリートの前衛的な雑誌に範をとった雑誌を刊行したり、ヘルマン・バルルを招いて朗読と講演の会を開いたりなどした。つまり当時沸騰していた世紀転換期の新しい文学思潮を、ベルリン、ヴィーン、プラハの大都市から移入しようとしたのである。ところがムジール自身の指摘もあつたとおりブリュンはあまりにも長いことヴィーンの政治的、文化的風下で受容することのみ慣れすぎていたのである。劇場の演目のなかにすでに表われているように、元来は創造性を挑発する刺激を秘めたものが、ブリュンの土地に移植されると、先鋭的な論争性を失って、お互いに排除するこなしに、さまざまな様式と思潮が複数で仲良く共存することになってしまったのである。K. H. シュトロールは多彩な才能に恵まれて、そのような新しい諸

々の文芸思潮を一身に統一しようとした、ブリュンではひとときわ抜きん出たブリュンの作家だった。ムジールも1度はともに朗読会を開いたことがあったが、後年通俗的と彼を非難している。その他ムジールが実際に交わった詩人・作家の多くも今は文学史から忘れ去られてしまった。文学史的評価はともかくムジールは、貪欲に吸収するブリュンの若い仲間たちと語り合いながら、当時のヨーロッパの、グストルのことばによれば《モダニズム文学》を乱読しながら、文学的出発を行なったのである。

先の講演会の広告で名を挙げられている作家たちのうち、シャーマンとシックは、ムジールが『テルレス』を書き始める少し前、1年ほど前にこの素材、つまりこの物語で<環境>、<リアリティ>、<リアリズム>となって表われているもの一切をプレゼントした。当時ふたりの才能に恵まれた<自然主義的>詩人と知り合いだった。もっともふたりとも若死したので今日では忘れられているけれど....」(P954)と、語っているふたりである。シャーマンはラングマンの流れをくむ社会主義的自然主義、プロレタリア文学の立場に立つ作家で、あらゆる形の抑圧を痛烈に告発し、それにプロテストした。1902年に出された『モラヴィア物語』のなかにムジールに提供された素材を作品化したものが含まれ、<エロティックと軍隊>というテーマでは、ムジールの『テルレス』と通じ合うという。チェコ人を母に持つブリュン生まれで、社会民主主義の立場を鮮明にしていたから、あの《民衆の友》の演劇評論家への勧誘はシャーマンによるものと推測される。シックは詩的直観がとらえた印象をリアリスティックな散文で形象化しようとした作家。評論『モラヴィア現代文学』(1906年)でモラヴィアの作家たちを紹介した。(Vgl. SM 59 ff.)

ブリュンではその頃、詩的リアリズム風の詩を書き続けていたマリィ・フォン・エープナー=エッシェンバッハが愛好されていたが、ムジール等若い文学者たちにとりわけ熱狂的に崇拜されていたのは、リヒャルト・シャウカールであった。G.ドナートはムジールの初期の習作について伝えている。「心理学的にはすに見る観方もできあがって、抒情的で繊細な気

分が表現されていた。工学的・自然科学的視点も時おりみられた。そこにはペーター・アルテンベルクが刺激的な影響を与えていたようだった。その上私たちきわめて身近かなところに師がいた。当時まだブリュンに暮らしていたリヒアルト・シャウカールである。彼は私たちには、詩人、高貴な生の形が意味するもの全てであった。」(LWW 210)

『シャウカール——1874年5月ブリュン生まれ、1942年10月ヴィーンに死す。オーストリアの抒情詩人、作家、エッセイスト。

商人の息子。ヴィーンで法学を学ぶ。1897年から1918年までオーストリア官界で部長職を務める。1918年貴族に列せられる。フランス・サンボリズムの翻訳を通じて詩を学んだ。メランコリックな死の気分漂う初期の抒情詩を、彼は美的でデカダンな印象主義に負っていた。それからリート風の平明さへ移行。伝統を意図した保守的な態度、モダニズムの頹廢に対する戦い、ことばを純粹に守るための懸命な努力が彼の文学の特徴。短篇小説、ドラマ、文芸批評、回想録、エッセイ、アフォリズムも書いた。⁽¹³⁾』

ヴィーン時代、シャウカールは当時のヴィーンの詩人たちがたむろしたカフェ《グリーンシュタイドル》の空気を吸い、またボードレール、ヴァレリイ、ゴーティエなどフランスの詩人から詩の手法を学んだ。ムジールたちは詩そのものから新しい詩的形象を多く受けとったのはもちろんのこと、彼のダンディズム、デカダンな耽美主義的ポーズにも大いに魅せられた。シャウカールのアフォリズムや短かい文芸批評にあらわれる詩人や作家たち——ダンヌツィオ、メーテルリンク、アルテンベルク、ボードレール、ブルジェ、ドストエーフスキー、ガルボルク、ヤコブセン、ホーフマンスタールなど——の作品は、そのまま若いムジールの読書の対象でもあった。(Vgl. SM 69)

その人びとの他に、ワイルド、ポー、リルケ、ヴェルレーヌ、チェーホフらの作品を掲載したのが、雑誌『ヴィーナー・ルントschau』である。この雑誌は1897年創刊で、1ヶ月に2回発行されていた。ムジールは記し

(13) Meyers Handbuch über die Lileratur. Mannheim 1970, S. 790.

ている。「『ヴィーナー・ルントシャウ』初期のかくも非論理的な創作をなぜ私は愛するのか。そこには——エマーソン以後の——ファンタジーの高貴な自由さがある。その作家たちは時たま凡庸^{メダイオクル}な人間であるが、なにか憑かれたようなところがあつて共感させる」(T 16) と。この雑誌は当初サンボリズムや耽美主義的作品の掲載に比重をおいていたが、やがて終刊に近づく時期には書き手が神知論者やオカルト心理学者にとってかわられる。創刊号にはホーフマンスタールが2篇の詩を発表したが——もつとも彼は即ちにこの雑誌と訣別する——、そのうちの1篇《Den Erben laß verschwenden/An Adler, Lamm und Pfau……》をめぐむジールの批評は、最初の耽読から30年以上経過の後にエッセイ『作家と文学』の1章(P 1214 ff.)に表われることになる。

しかしこの時期のジールを圧倒する何にもまして大きな出会いは、ニーチェとのそれであつたと思う。「運命——私がちょうど18歳で初めてニーチェを手にしたこと。」(T 19) あるいは「ニーチェ——若かつた頃私は彼の3分の1をかるうじて理解したか。決定的な影響。」(T 903) ニーチェのどの著作を読んだのかは詳らかではない。だが下士官的教育を抜け出たばかりのジールが、ニーチェの説く精神の高貴さに胸が高鳴るばかりの共感を寄せたことは想像に難くない。ニーチェのなかに同時代を生きる思想のあらゆる可能性を見出したのである。そしてニーチェ読書の最初の熱い衝撃は、幼いジールにもすでに内在していた、ロマンティズムに満ちた神秘的までに孤高な精神への憧れをよび醒ました。「才能に恵まれた若い人間が歩み出すとき——ここにスタンダール、そこにエウリピデス、それから同時代者という風に自分の興味を引くものを発見する」(T 783) とあるように、ニーチェはジールの生の単なる指針にとどまらない、今ものを書き始めようとするもうひとつのジールの《私》、つまり物語る《私》もまた、ニーチェ的精神の高みを志向する。ジールはそれを天使と呼ぶ。「もうひとつの形式——英知に富んだ大天使あるいは志向された《私》の形式。大天使の経歴にかなつたものは、経験的な《私》とはなじまな

い。双方の会話、起ったこと、起らなかったこと全てについて。つまり大天使だけが語るのだ、聞き手であるローベルト・ムジールに。ムジール氏、あなたは30年7月6日に……などと。天使の視点から、つまり経験的な獲得された《私》からではなく、それを俯瞰する高みから文学について語ること。天使は17歳のころ別なものの代わりにやって来た。大天使は経験的人格に結びついている、ゆえに必ずしも全知ではない。想像しつつ、推量しつつ。」(T 680) 気ままな連想が許されれば、ムジールのこの大天使にはニーチェの〈ツァラトゥストラ〉の面影を重ねてみたい気がする。『生体解剖屋』(Monsieur le vivisecteur)を始めとするムジールのごく初期の散文群には、そのようないささか背伸びした姿勢の《大天使》の意識が貫かれている。そしてそれらはまたムジールの厳密志向に支えられながら、ニーチェが時代に対して挑んだ問題を受けとめ、ニーチェの概念とことばを摂取したあとを明きらかにとどめている。

『特性のない男』の初期の構想は、ムジールと幼な友だちグストル、その妻アリスを照応させることが可能な、ウルリッヒとヴァルターとクラリッセの物語であった。ヴァルターにはヴァーグナー崇拜者の、クラリッセにはニーチェのいわゆる超人、天才の観念にとりつかれた人間の特性を刻印したムジールの意図はやがて大きくふくらみ、単なる青春記念碑的なところを越える。前世紀末以来青年たちの心を熱狂的にとらえた、ヴァーグナーとニーチェは、ヴァルターとクラリッセの生活のなかで、厳粛な核の位置を与えられていながら、世俗化を免れていない。それを描くムジールのアイロニカルな手つきは、帝国崩壊以前、ファシズム抬頭以前の真剣なのに悪をはらみ、どこかもの憂い精神的状況をくっきりと浮かび上がらせているのである。

《魂のとき》

夢中の高揚のあとには覚醒がくる。ブリュンの青春を早くも回顧するようなムジールの短文がある。『旅の断章』という。1902年3月12日づけの『日記』に、類似の文が若干みられるから、それからあまり遠くない時期

のもののように思われる。

「不協和音。(わが青春を訪れて。)

ミニチュアのような眺め—再会したブリュン。17歳から20歳まで最初の学生生活の街。(私はゆっくりと贅沢に味わっている。この地で私と触れ合ったものは全て大事なのだから。)朝早くフランツ山上をぶらついた。初めてだ。奇妙な山だ。…太陽は輝き、雀が騒ぎたち(鳴きしきり)、あたりには人ひとりいない。雀は山腹より頂きに近いところにある1本のプラタナスの木に群がって鳴き騒いでいる。

(私は)風でたわんだ手すりのかたわらに立っている。眼下のずっと向うの片側に、娼家が並ぶ人気のない通りが見はるかせる。うしろ側からで、蓋をあけた箱のように、家の中庭が見とおせる。ふと、この街で初めてパデレフスキーが弾くショパンを聴いたことを思い出した。押しつぶされてかしい家、隅が日陰になっている中庭、その外側についている木の階段、てこ式ポンプ、木挽台、ひっくり返った桶。みんな影のなか。小さな暖炉だけが天の太陽へもうもうと煙をあげ、猫が屋根の棟に丸まって陽の光に輝いている。森番の小屋、農民の平和。

あるとき夜にぼくら、俳優や学生がいきりまじって、この通りをふざけながら歩いていた。そしてこんな類の家へくり込んだ。小さなま四角の窓、石油ランプ、防水布を張った寝椅子があった。ぼくらは何もしたくなかった。仲間の誰かが女の子のひとりの外陰にステッキの石突きを差し込んだ。ぼくらは全員とりまいていた。ひどく醜い女の子だった。<ママ>は怒った表情をした。とそのとき女の子が笑う。ぼくらもみな笑った。<ママ>も笑った。(私はあのときいたのかな?他に誰がいただろう。解からぬ。)

私はメロディが覚えられない。だがいつひとつの感情が私に刻みこまれたのかは、よく覚えている。あの頃、私が17歳でパデレフスキー⁽¹⁴⁾の演奏を聴いた頃、この感情はひとりの女性への想いと結びついていた。この女性は私より年上だったはずだが私はこの女性と近しくはなかった。私が好意の感情を持っていただけなのだ。きっかり1秒で、そんな感情が起るものだ。それから彼女と句読点のない意味もない会話を交したように思う。ただそれだけ——太陽のもとに立ち、(冷たい風に吹かれて)風を感じて凍てつくときのように。」(Ta 826 ff.)

この短文のなかで、文学や芝居を通じて知り合った友人たちとのボヘミ

(14) イグナーツ・パデレフスキー (1860-1941) は、ポーランド出身のピアニスト、作曲家。当時はスイスに住んでいた。1898年終りロシアへかなり大きな演奏旅行を行なった。祖国の首都でも慈善コンサートを開いたが、その前に道すじにあるブリュンでも演奏会が催されている。ムジールが彼の演奏を聴く機会を得たのは、この時1898年秋も終る頃と推定される。(SM 133 ff.)

アン的な生活の喧噪はやがて後景に退き、若いムジールのひとつの哀切な心象風景が透かし見えてくるのが感じられる。ムジールの詩心を目覚ませ飛翔させたパデレフスキーのショパンとひとりの女性（私たちはムジールにならってヴァレリィと呼ぼう）、娼婦がうずくまる薄暗い娼家の濼み、それに再び母ヘルミーネへの吸引と反撥が若いムジールの内面に明滅する愛の光と影である。

ムジールは依然として母の呪縛圏にいる。だがそれは今、かつての少年の日々のように、自己矜持とモラルの意識がお互いの激しさとなって衝突するという形をとらない。ひとり子として育ち、男だけでなる軍人の世界をひと回り小さくした学校生活を送り、そこで同性愛の空気にも触れたムジールは、今ひとりの女性に出会うことのできるまえに、母というまだ若く美しい異性をあまりにも身近かに重たくかかえこんでいる。この頃の夏ムジールは生地クラゲンフルトに近い避暑地ヴェルター湖畔に、家族で滞在したようだ。この経験をムジールは、母を回想するときのつねであるあのアンビヴァレンツ、強い愛着を隠した反撥と、寛容な叙事的態度の両極点から語っている。一方にはまだ十分に若い母の生々しい肉感性が漂い、もう一方ではムジール自身の自然な自己発露を妨げる母が強調される。

「私は男性用水泳学校の飛び板の上に立ち、他方隣接した女性用プールの飛び板の先端には母が立って湖を見下ろしていた。母はバスローブに身を包み、もう泳いだ後だった。私がそばにいるのに気づいてはいなかった。そしてバスローブを締めなおすために、母は全く無造作にその前を開けた。1瞬彼女が裸で立ったのを私は見てしまった。母はその頃40歳を少し越えたばかりだったろう、まっしろでふっくらとして美しい姿体だった。それを今日に至るまで私は賞讃してやまないけれど、それよりもはるかに羞恥のようなものの方が強い。当時私の身内を走ったのは怒りをふくんだ驚愕だったと思っている。」(T 315)

女性へ向うあるいは女性から働きかけるエロスの初めが、ムジールにとって母であったことは否めない。その間に若い友人たちと娼家へ出かけ、テルレスがボジェナを前にしたときのように、性をむきだしにした娼婦の

存在から、母も共有しているはずの性の秘奥を探りあてようとしたこともあっただろう。やがてムジールの性的夢想は母の上を揺曳しつつ、もうひとりの女性をも内包し始める。

「精神分析。ふと思いついた、ヴェルデンの秋を。私は18歳から20歳の間くらいだった。月の光が降るなか、ポプラの並木に沿った道を散歩。湖の方から霧。私は詩を作った。重苦しい憧れに満ちた気分からできたもので、たいした価値はなかった。この気分は、性、ありふれた可能性ならすぐ眼の前にあるのに、それにもかかわらず是非手にいれたいと思う恋びとに支配されているものだ。……この実体はないが、誤解のしようもない状況では、母は邪魔する存在である。母は要求、最少限精神的な要求をする。母は女の⁽¹⁵⁾アウレア一切を不可能なものにする。詩作の本能は母に妨げられる。極端に考えれば、次のようなこともいえる。つまり、性は——必ずしもそれをそそるものだけではない——、そそらないものも愛するのだ。ヴァギナの匂い、なにやらいかがわしいこの匂いは歓喜となるだろう。あけっぴろげな寛ぎが救いとなるだろう。肉体性がきわめて曖昧なものだということが、肉体の最高の理想化を求めている。その一切はいつも過程にあって、非現実的で、抑圧をともなっている。それに対立するのが母の性的ではない肉体性である。ふくれた神々しくもない形。年老いた皮膚の匂い。ひどく腹立たしく、挑撥的な障害物ではないか。オイディプス的感情のかわりに、いらいらした拒絶反応が生ずるではないか。それは悲しく健全な真実、作り物ではない真実ではないだろうか？ 全く精神分析学の逆である。母は欲望の対象ではない。偶然が若い男に性的な可能性を与えるとき、あらゆる欲望の情動、その情動の発現を妨げるのが母である。」(T 773)

ムジールは青春の熱狂のなかにいる。デカダンスと耽美主義の雰囲気をつたえた抒情詩へ傾いた心は、パデレフスキーの奏でるショパンによって翼を得る——当時の民族主義の高まりのなかで、ポーランド人の演奏者が再現するショパンのパッションはどれほどだっただろう——。そのような詩作への意志を秘めた詩的瞑想の気分と、重苦しいような性的夢想が濃密

(15) Kaiser/Wilkins: Robert Musil. Eine Einführung in das Werk. Stuttgart 1962, S. 77, 参照。彼らの解釈によれば、《Aurea》ということばは、《Aura》と《Aureole》が奇妙に混合されたものという。前者は匂い(戦士も)、デモーニッシュで魔術的な発光、それに癲癇(モースブルッガーが病み、母の家系にも現われた)の前駆症状を意味する。後者は聖像の後光(金冠)、聖母の象徴を指す。

に溶け合った星雲状の季節を、ムジールは東の間ではあるが忘れ難く体験する。この季節に母とは異なって、ヴァレリィと呼ばれるもうひとりの女性が通過する。「何度もというわけではないが、私は他の人びとを激しく愛する能力を持っていた。父が死ぬと想像したときの悲嘆——アイゼンシュタットのホームシック——ヴァレリィ体験——マルタ。」(T 912) ヴァレリィは体験された人生のひとつの節目的点として、ムジールに回想されるばかりで、ヴァレリィその人については語られないから、⁽¹⁶⁾ 事実は何も知られていないに等しい。

この時期になされた、文字通りムジール最初の詩作の試みとしては、次のような作品があげられる。『パラフレーズ』(T 10 ff., Ta 814)——大部なまとまりにして出版したい意向をムジールは抱いていた——、抹消や書き換えがあつて決定稿の定め難い『パデレフスキー幻想』の草稿3篇(Ta 828 ff.)、『誘惑』(T 26 ff.)と『星』(Ta 816)、『雲』2篇(SM 141 ff.)、それに『朝』2篇(Ta 843 ff.)。これに、「なぜぼくは書かないか？」で始まるヴァレリィあてとされる詩的韻文も加えることが許されよう。この一群の詩には、詩節、音節数、行数、脚韻への統一的な配慮、つまり厳密な詩形式の精神が欠けている。が、どうしても詩的散文へ流れがちなそれらの詩のなかからは形式という容器におさまらなかつた若いムジールの詩的ロマンティックな情感が溢れ出している。後年のムジールが断念する詩と音楽がまず、初めて文学へ眼を開いた時期の彼を魅了したことは興味深い。『パラフレーズ』では<感覚のさすらいびと>というテーマが添えられて

(16) 《小説のための覚え書き》を手がかりに、S.ムロートは問題の時期(1898-1901)ブリュンに、ヴァレリィという名の女優が存在したかどうか調査した。が、いかなる劇場関係資料にもその名は見あたらなかつた。ただV.レオンという作家の民衆劇『いとしい子供たち』のなかに、ヴァレリィという役名があるのを発見した。この劇は1898年末から1899年始めにかけて数回上演され、大成功だったという。この時ヴァレリィ役を演じたのがパウラ・ウルマンで、1897年秋から1900年5月まで<素朴な恋人>役で舞台に立っていた。ブリュン市民の寵児だったらしく、惜しまれてベルリンへ移ったという。彼女の年齢はムジールより数歳年上である。(Ta 14) もちろんこれはひとつの調査が示した可能性であつて、ウルマン=ヴァレリィ=ムジールの恋人という一致を証明するものは何もない。

いるように、月の光のなかに、汽車の旅をする<私>や旅回り芸人の具象を浮かびあがらせつつ、孤独な神秘家の時空を超越した無限の放浪を歌おうと意図されている。また、1898年晩秋にパデレフスキーのコンサートを聴き、その後1899年の始めから1902年前半までの間に『パデレフスキー幻想』が何度か試みられている。いわゆるヴァレリイ体験は、ムジールのいくつかの短かい断片的なことばから推察すれば、1898年後半から1901年にかけての時期である。あのヴェルター湖畔に滞在し、詩作を志した日々が、最もヴァレリイを想った日々でもあったようだ。『パデレフスキー幻想』のライト・モチーフは、若い感応しやすい感覚だけが、性の識閥で生涯で1回限り体験する、音楽による官能の解放である。音楽が奏ね出す「憂愁をおびた官能」は、詩のなかの<私>の内面に新しい地平を開く。<私>はその恋人とともに、「熱い女の腰がぼくらの方へしなうような」、同時に「悲哀が無防備のぼくらを待ち伏せているような」愛を共有する。そしてこの悲哀とは愛それ自体がアプリアリに内在している、愛を不可避免的に分裂へ導くなにものかへの、おののくような予感でなくて何だろう。恋人たち、とりわけ<私>をその熱い接吻のさなかですら脅かすものは、この悲哀感だけにとどまらない。「恐ろしい運命」、つまり「毒を含んだ硬い乳房をもった運命」も<私>を待ち伏せているのである。詩のなかの<私>、その背後の若いムジールは愛の意識のなかで二重の苦悩を背負った表情をのぞかせている。「毒を含んだ硬い乳房」とは老いつつある母への呪咀のイメージであろう。ここで私たちはあのヴェルター湖畔のムジールの内面的葛藤を思い出すことができる。根深く威嚇するのは、ムジールのマザー・コンプレックスを運命的になお刺激し続ける母である。

他方、愛それ自体が純粹に内包している悲哀感は何によるものなのか。それはおそらくヴァレリイ体験を通じて試みに晒され、かつ異なった認識へいたらざるを得なかった若いムジールのういういしい愛の観念と関っているだろう。この頃のムジールの『日記』には情事をテーマにした断章がいくつか見られる。そのなかで明きらかに自伝的色彩の濃いと思われる

『小説のための覚え書き』をヴァレリィ体験に触れる手がかりにすれば、「兄弟はふたりとも、ひとりの女優と知り合いになった」(T 47)と述べられているローベルト初恋の女優を、ヴァレリィに重ね合わせることが可能となる。『覚え書き』のなかでローベルトはこの女優とひとつの体験を分かち合う。

「ものすごい嵐がきた。はじめて彼の官能は、金糸で刺繍された赤い愛のマントをまとった。彼の全存在が変わった。思いやり、何か捧げようとする心が湧き上がった。思想の深い奥行き、思想の精巧な絡み合いが明瞭になった。わずか数週間で彼は自身を起えて成熟していった。彼の思考と感情が秩序を得る。静けさと成熟の哲学が形成される。が次に幻滅がきた。あっさりと、すばやく、避け難く。彼らは終わった。＜魂のときの1刻1刻が必らずや成長させてくれるものではなくなくなってしまったら、これ以上いっしょにいるのは背徳的だよ。さよならだ＞と彼はいった。前日彼女がある彼を演じるのを見たのだが、彼にはそれが真実ではなく、陳腐で興ざめのように思われたのだった。その瞬間彼ははっと眼が醒めた。さわやかなそよ風がさっと吹いてきたように、新しい見慣れない光景が突然開けたように。その夜彼らはいつもより激しい官能を味わった。きりきり痛みながらも。若い男はなぜ気取りのない表現ができないのか。その愛撫のときに。翌朝は黙っていた。午後に彼は訪れて、そして別れを告げた。」(T 48)

これが物語られた女優との愛の顛末である。この愛の頂点で起ったことを、ひるがえってムジール自身が追求しようとした愛の何であるかを解くキーワードが上の文中と同様に詩のなかにも見出される。「その和音につつまれ/ぼくらは敬虔な魂のひとつとなった/孤独のうちに」(Ta 831) あるいは「ぼくが今ほどおまえに近しいのは希有のことだ。ぼく自身に今ほど近しいのが希有なのだから。ぼくは敬虔に野蛮人のなかにたちまじっている。敬虔に——なぜといってぼくの魂は満たされているから——……」(Ta 815)

満たされた魂——これが若いムジールの希求した全き合一の状態である。この「もうひとつの状態」のなかで彼は愛と詩心とそして理性的な思索が希有に幸福な合致を遂げるのを求め、閃光のように経験する。「偉大な愛の人びと——キリスト、釈迦、ゲーテ——それにヴァレリィを愛したあの秋

の日々のぼく。この人びとは真理を追求しないが、自らの内部で何かが全的なものに凝集しようとするのを感じている。それは何か純粹に人間的なもの、(汎神論的なもの)、自然のプロセスなのだ。」(T 16) あるいは「かつてぼくはヴァレリィに書いた、毎日ひとつの麗わしい思いがおのずと湧き上がるのを感じただけで満足だと。当然だ。マラルメにならっていえば、芸術の感覺的秘奥に包まれて……ということ。」(T 13)

魂の問題がムジールの心をどれほどとらえていたかは、後年の彼自身の折々のことばが証明している。例えば、1905年ベルリン大学在学中のムジールは、エレン・ケイの評論『生の作法による魂の広がり』⁽¹⁷⁾を読む。「夜カフェでエレン・ケイの評論を読み深く心をゆり動かされた——私自身の過去の声を聴いたようで。ここには昔の私の思考様式がある。ヴァレリィ伝統だ！」(T 151) 『日記』においてこの記述の後数ページはエッセイからの抜粋が占める。この間ムジールの魂をめぐる考察の方向は、ひとつは過去へ、すなわちかつてのヴァレリィ体験の言語化へ、もう一方は未来へ、つまり『特性のない男』のディオティーマへエレン・ケイの魂論をパロディとしてとり入れる構想へと向けられる。この時点での顧りみたヴァレリィ体験とは何だったのか。「ほとんどすべての人はその生涯の5月の時期に、生ける生命の白く花咲く約束のように、1度は大いなる感情の時に身を置くものだ。この種の人はその後全世界を獲得したかもしれないし、あるいは失なったかもしれない。だがいずれにしても決断は魂の外で下されるのだ」(T 160) いつ、どのようにしてその失墜が始まったかはあの女優との挿話から推測するしかないが、魂と理性の総合を目指した人間の全体性を追求するムジール最初の直載な試みは挫折したのである。

それを青春を通過するときの若者にありがちな気負いとみなすことは易しい。だがこの課題こそムジール文学の根底をなすものではあるまいか。

(17) Ellen Key: Die Entfaltung der Seele durch Lebenskunst. In: Neue Rundschau. Juni/1905. エレン・ケイ (1849-1926) はスウェーデンの教育学者、女権論者。なお、著書『恋愛と結婚』は19世紀を代表する婦人論のひとつである。

なぜなら、愛のなかの魂の深化は作品を貫く変わらぬ永遠のテーマだし、『特性のない男』は全体性追求の壮大な試みと挫折だからである。「男は愛し悩み、祈るときこそ人間なのだ。魂に満ちあふれた人びとは、愛の没落を恥じる。この廃墟はたいいてい、自分の仕事と自分の本質が分れ道をとってしまったこと、自分たちがその本質においてよりもむしろ仕事において実質的であったこと、自分たちが最も深い意味において現実とはならなかったことを意味するからである。(ヴァレリイ体験)」(T 167) この回顧はヴァレリイ体験直後の生々しさを失ない、ひとつの客観的人生知となっている。だがヴァレリイ体験以来、「道徳的に繊細だ」(T 153) というムジールには、内面の分裂の意識が深刻につきまとうようになる。21歳の誕生日に寄せた文から。「……というのもローベルト・ムジールがまだヴァレリイ嬢を愛していた頃は、こんな些細なことは大いなる魂の安らぎのなかに没していたのだから。あの頃彼は全き人間だったのに、友人グスターフがローベルトに発見したある種の裂け目が、この頃またも顕著になることがある。」(Ta 816) ムジールの抒情詩の試みの最後は——後の『イシスとオシリス』は除いて——、病室の窓から晩秋の美しさに満ちた風景をながめる、死にゆく男の想念を歌ったものである。(Ta 843 ff.) 抒情詩的魂の時代は終焉したという哀惜をこめた認識はごく自然であったろう。しかし葛藤はやまない。作家ムジールを特徴づける、厳密な思考と精緻な理論への傾向と、ほとんど神秘主義に近いロマンチックな夢想の傾向が並存して自己のうちで常に葛藤している状態をムジールは生涯にわたって引き受けることとなる。「私のなかでまたもや、脳と骨髄の争い、論理的思弁の喜びと、あの過ぎ去った時代のむしろ抒情的な本性の争いが起っています。」(T 21)

この後数年間のムジールについては、工学への興味喪失、心理学・哲学へ方向転換のきざし、『テルレス』執筆の開始、そしてヘルマ・ディーツとの交わり、あるいはグストル、アリス夫妻との交際などなお書くべきことは多い。私たちはいずれまた、魂の飛翔を憧れながら、自己の内面への沈潜と思索を深めてゆくムジールに再び会うことができるであろう。はたちのムジールとはしかしここで別れなければならない。